ヤングケアラーの支援等対策の検討

報　告　書

令和３年８月 15 日

エス・ティー・アート

＜ 目 次 ＞

第１章　ヤングケアラーの現状 1
１－１．ヤングケアラーとは 1
１－２．なぜ子どもがケアを担うことが起きるのか 2
１．病気や障害のある大人が親としての役割を果たすことへの支援が不足 2
２．日本の家族領域に起きた変化 2
１－３．全国の実態調査結果の概要 5
１．学校調査結果 5
２．中高生調査結果 7
１－４．埼玉県ケアラー支援計画のためのヤングケアラー実態調査結果の概要 18
１．ヤングケアラーの属性 18
２．被介護者の属性 19
３．ケアの状況 20
４．ケアの影響 22
５．ヤングケアラーが望むサポート 23
６．ヤングケアラー本人の生活満足度 23
７．調査結果の分析 24
第２章　国の方針 29
２－１．今後取り組むべき施策 29
１．早期発見・把握について 29
２．支援策の推進 31
３．社会的認知度の向上 33
２－２．ヤングケアラー支援に係る既存の制度等 37
第３章　国外事例 50
３－１．イギリス 50
３－２．オーストラリア 67
３－３．アメリカ 71
第４章　国内事例 73
４－１．埼玉県 73
１．埼玉県ケアラー支援条例 73
２．埼玉県ケアラー支援計画 78
３．ヤングケアラー実態調査 85
４－２．北海道栗山町 90
４－３．三重県名張市 96
１．名張市ケアラー支援の推進に関する条例 制定の趣旨及び背景 96
２．制定の内容 96
４－４．大阪市 102
１．「ヤングケアラー支援に向けたプロジェクトチーム」の発足 102

２．大阪市における実態調査の実施（予定）..... 102
３．普及啓発活動（予定）..... 102
４－５．大阪府..... 105
１．府立高校におけるヤングケアラーに関する調査結果の概要..... 105
４－６．札幌市..... 106
１．札幌市ヤングケアラーに関する実態調査結果の概要..... 106
４－７．山梨県..... 108
１．山梨県ヤングケアラーに関する調査結果の概要..... 108
４－８．さいたま市..... 112
１．さいたま市ヤングケアラーの実態調査結果の概要..... 112
４－９．埼玉県入間市..... 114
１．入間市ヤングケアラー実態調査結果の概要..... 114
４－１０．奈良県..... 118
１．奈良県ヤングケアラー等に関する実態調査結果の概要..... 118
４－１１．京都市..... 119
１．京都市ヤングケアラーの実態調査結果の概要..... 119
４－１２．岡山県総社市..... 124
１．総社市ケアラー支援の推進に関する条例..... 124
４－１３．茨城県..... 127
１．ケアラー･ヤングケアラーを支援し､共に生きやすい社会を実現するための条例 127
４－１４．岡山県備前市..... 132
１．備前市ケアラー支援の推進に関する条例..... 132
４－１５．その他..... 135
１．全国のケアラー支援に関する条例の制定状況..... 135
２．その他..... 135
第５章　神戸市の現状..... 136
５－１．神戸市の実態把握..... 136
１．ヤングケアラーの支援に向けたプロジェクトチーム..... 136
２．あんしんすこやかセンター等へのヒアリング..... 137
３．神戸市のヤングケアラーの推計..... 138
４．課題..... 139
５－２．神戸市の対策の現状..... 141
１．相談・支援窓口の設置..... 141
２．身近な方々への理解の促進..... 145
３．交流と情報交換の場の設置..... 148
４．こども・若者ケアラー支援マニュアル..... 148
第６章　支援等対策の検討..... 152
６－１．ヤングケアラー支援策の方針..... 153
１．実態の把握..... 153
２．早期発見の取組み..... 153

３．ニーズの把握..... 154
４．支援策の推進..... 154
５．ヤングケアラーの法的な位置づけ..... 157
６．家族介護者（ケアラー）支援としての強化の推進..... 157
７．多機関連携によるヤングケアラーへの支援の推進..... 157
６－２．ヤングケアラー支援策の提案..... 159
１．ヤングケアラー認定と各種支援メニューの創設..... 159
２．神戸市ヤングケアラー条例の制定..... 161
３．多機関型地域包括支援センター（ネウボラ）の設置..... 162

第１章　ヤングケアラーの現状

１－１．ヤングケアラーとは

ヤングケアラーとは、家族にケアを要する人がいる場合に、大人が担うようなケア責任を引き受け、家事や家族の世話、介護、感情面のサポートなどを行っている 18 歳未満の子どもをいう。

１－２．なぜ子どもがケアを担うことが起きるのか

資料：埼玉県ケアラー支援に関する有識者会議　第１回資料

子どもがケアを担うことが起きると考えられる背景について、「埼玉県ケアラー支援に関する有識者会議」第１回会議において、成蹊大学文学部現代社会学科教授、澁谷智子氏は以下の通り述べられている。

１．病気や障害のある大人が親としての役割を果たすことへの支援が不足

子どもがケアを担う状態は、単に家族が病気や障害を持っているだけでは発生しない。親の病気や障害は、子どもがケアを担う状況を引き起こす可能性があるきっかけに過ぎず、一般的に、ヤングケアリングは、病気や障害のある大人が親としての役割を果たすことへの支援において、適切な医療や福祉のサービスがなかったり、効果的でなかったりする場合に起こると考えられる。

実際、これまでつくられてきた制度は、医療や福祉のサービスはケアを必要とする人を中心につくられてきており、ケアを受ける人がケアをする人でもあるという視点が十分になかったのではないかと考えられる。ケアを必要とする人が親としての役割を果たすときの支援の視点がまだ十分になく、その結果として、親が外にサポートを求めにくい、親としての責任を果たしていないのではないかと見られてしまうことを恐れ、実態を言えない。そのため、子どもがそこでケアを担わざるを得ないということが起きていたということがあるのではないかと考えられる。

２．日本の家族領域に起きた変化

日本での家族の領域は、この数十年で大きく変化した。例えば、1 世帯当たりの人数は、1950 年代前半に比べて、2017 年には約半数になっている。また、母子世帯は、25 年間で 1.5 倍、父子世帯は 1.3 倍になり、家族の中の人手、家族が家にかけることのできる時間は、相当減ってきている。

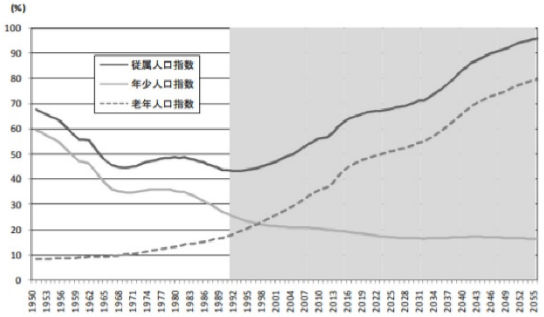
一方で、日本人の平均寿命は世界トップレベルであるが、健康寿命は平均寿命よりも 10 年短く、人生の晩年には誰かに支えられる 10 年があると言っても過言はない。高齢者の数も、精神疾患を持つ方の数も増加している。そういう意味で、ケアを必要とする人は増えている状況、そして、そのケアは家族がすることが期待されている。

さらに、日本は、1990 年代前半に、人口オーナス、つまり、生産年齢人口が総人口に占める割合が少なくなった時代に入り、人口減少の中で働き手を確保するために、女性も元気な高齢者も労働市場で働くことを推奨されている。

こおようにケアを必要とする人は増え、在宅福祉が推進されているにもかかわらず、大人はどんどん労働市場に駆り出され、家族にかけられる時間やエネルギーは減少する。子どもがいる共働きの世帯は、専業主婦世帯よりも、家のことにかけられる時間が少ない状態となる。

15～64歳の生産年齢人口が総人口に占める割合が少ない「人口オーナス」の時代

・人口減少の中で、女性も元気な高齢者も労働市場で働くことを推奨される。
・ケアを必要とする人は増え、在宅福祉が推進されるのに、大人は労働市場で働かざるを得ない状況で、家庭にかけられる時間やエネルギーが減っている。



（備考）2008 年以降は将来人口推計による。従属人口指数＝（0～14 歳人口＋65 歳以上人口）／15～64 歳人口、年少人口指数＝0～14 歳人口／15～64 歳人口、老年人口指数＝65 歳以上人口／15～64 歳人口

小峰隆夫・岡田恵子，2009，「人口オーナス下の産業・企業」『イノベーション・マネジメント』第6巻，87-98，法政大学イノベーション・マネジメント研究センター．P.90より

5

出典：「埼玉県ケアラー支援に関する有識者会議」第１回資料

家事関連時間をみると、共働き世帯では、専業主婦世帯よりも妻の家事関連時間は少なく、ひとり親世帯はさらに少なく、子育て期のひとり親の家事関連時間は、女性が３時間59 分、男性が１時間９分となっている。経済的な事情から大人が働かざるを得ず、労働で疲弊した大人が家庭のケアを十分にできなくなったり、あるいは、自らも病気や障害を抱えてしまったりする中で、大人のようには稼げない子どもが家族を支えようとケアを担うという結果となる。ケアを度外視した働き方を進めてきた社会の在り方が、結果として、今、子どもや若者から時間やエネルギーを奪ってしまっている構造があるのではないかと考えられる。

家事関連時間　（家事、介護・看護、育児、買い物）

１日あたりの家事関連時間（2016年）

「夫が有業で妻が無業の世帯」
　妻が7時間56分、夫が50分
「共働き世帯」
　妻が4時間54分、夫が46分

表４－４　共働きか否か，行動の種類別生活時間の推移（平成８年～28 年）
一週全体，夫婦と子供の世帯の夫・妻

（時間，分）

		共働き世帯					夫が有業で妻が無業の世帯				
		平成8年	平成13年	平成18年	平成23年	平成28年	平成8年	平成13年	平成18年	平成23年	平成28年
夫	仕事等	8.14	8.02	8.22	8.30	8.31	8.12	8.11	8.19	8.22	8.16
	家事関連	0.20	0.26	0.33	0.39	0.46	0.27	0.35	0.42	0.46	0.50
	うち家事	0.07	0.09	0.11	0.12	0.15	0.05	0.07	0.08	0.09	0.10
	育児	0.03	0.05	0.08	0.12	0.16	0.08	0.13	0.17	0.19	0.21
妻	仕事等	4.55	4.38	4.43	4.34	4.44	0.03	0.04	0.02	0.04	0.06
	家事関連	4.33	4.37	4.45	4.53	4.54	7.30	7.34	7.34	7.43	7.56
	うち家事	3.35	3.31	3.28	3.27	3.16	5.02	4.49	4.42	4.43	4.35
	育児	0.19	0.25	0.36	0.45	0.56	1.30	1.48	1.57	2.01	2.24

総務省統計局「平成28年社会生活基本調査　生活時間に関する結果　結果の概要」より

子育て期のひとり親
　女性が3時間59分
　男性が1時間9分

表１－２　子育て期のひとり親の家事関連時間

	家事関連時間（分）			
	家事	介護・看護	育児	買い物
子育て期のひとり親（女性）	158	5	43	33
子育て期のひとり親（男性）	37	1	12	19

＊総務省統計局「平成 28 年社会生活基本調査 生活時間に関する結果 結果の概要」34～37ページを基に作成

澁谷智子，2018，『ヤングケアラー』中公新書，p.10より

6

出典：「埼玉県ケアラー支援に関する有識者会議」第１回資料

今後も、子どもがケア役割を引き受けることへの需要は増えていく可能性が高く、具体的には、高齢者の増加、世帯人数の減少、家族というユニットが不安定なものになっているという状況が起こる。また、日本では、長時間労働で非正規雇用者の経済的不安定さが顕著であり、日本社会の構造として、どうしても家庭のことが仕事よりも後回しにされ、その空白を子どもや若者が埋めざるを得なくなっている状況があると考えられる。

家族は、子どもがケアをしてくれると、「本当にありがとう」「すごく助かる」と言い、子どもは自分が役に立っていると思いますます頑張る。その結果、ケアの状況がさらに重くなる、あるいは病状が悪くなる。しかも、子どもは自分の頑張りが少なかったのかもしれないと思ってますます頑張ってしまうという力も働いてしまう。家庭の中には、それを止める力は恐らくない。子どもが家族の役に立とうとすることはよいことではあるが、自分のことができなくなるまでケアを引き受け過ぎないように、家族の外の人が子どもの負担を軽減する方法を真剣に考えていくことが必要とされている。

１－３．全国の実態調査結果の概要

資料：令和２年度 子ども・子育て支援推進調査研究事業「ヤングケアラーの実態に関する調査研究」（令和３年３月、三菱 UFJ リサーチ&コンサルティング株式会社）

「ヤングケアラーと思われる子ども」等の実態をより正確に把握し、今後の検討に活かすことを目的に、令和２年度に「中学校・高校における学校におけるヤングケアラーへの対応に関するアンケート調査」が実施された。

調査は、以下の学校及び中高生に対して実施された。

【調査の対象、方法等】

１．学校

令和２年 12 月 21 日から、以下の学校に対してアンケート調査を実施（④は令和３年１月 26 日から）。

①全国の公立中学校から層化無作為抽出した 1,000 校（全体の約１割）（回収率 75.4%）

②全国の公立全日制高校から層化無作為抽出した 350 校（全体の約１割）（回収率 71.1%）

③各都道府県より公立定時制高校１校抽出した 47 校（回収率 57.4%）

④各都道府県より公立通信制高校１校抽出した 47 校（回収率 74.5%）

２．中高生

令和２年 12 月 21 日から、以下の中高生に対して Web 調査を実施（④は令和３年１月 26 日から）。

①中学２年生（回収数 5,558 人）

②全日制高校２年生（回収数 7,407 人）

③定時制高校２年生（回収数 366 人）

④通信制高校の生徒（回収数 446 人）

１．学校調査結果

（１）ヤングケアラーの定義に該当すると思われる子どもの有無

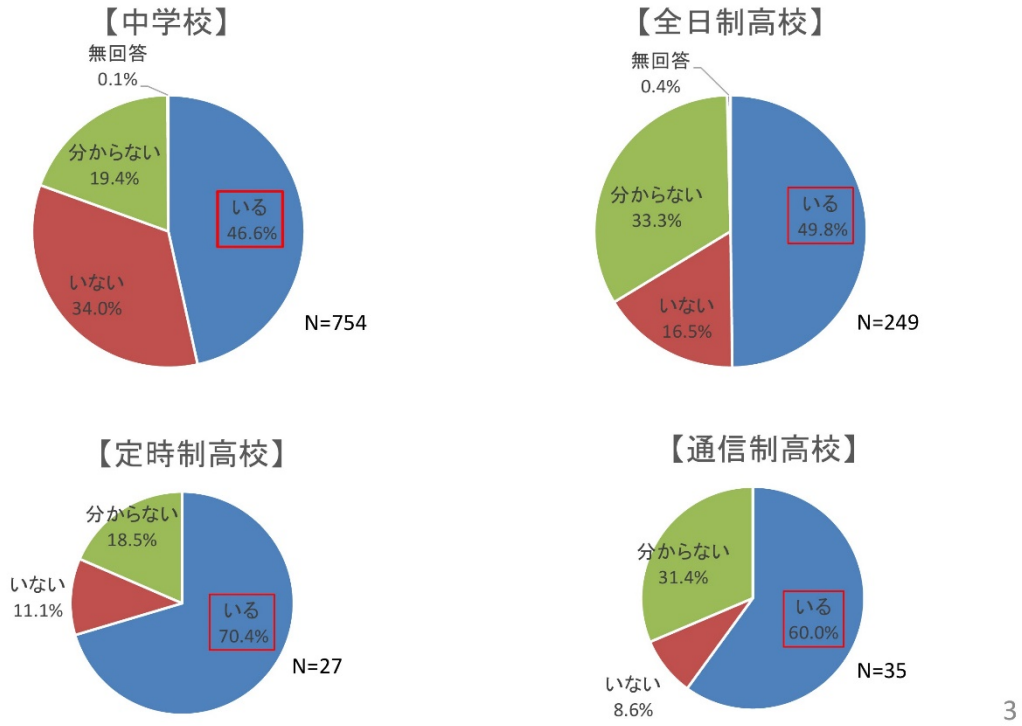
学校に対し、ヤングケアラーの定義に該当すると思われる子どもの有無について質問したところ、いずれの学校種でも「いる」が最も高く、定時制高校で 70.4%、通信制高校で 60.0%であった。

（２）ヤングケアラーと思われる子どもの状況

ヤングケアラーと思われる子どもが「いる」と回答した学校に、子どもの状況について質問したところ、いずれの学校種でも、「家族の代わりに、幼いきょうだいの世話をしている」が最も高い 。次いで「障がいや病気のある家族に代わり、家事買い物、料理、洗濯、掃除などをしている」が多い。全日制高校では「家族の通訳をしている」が３～４割程度みられた。

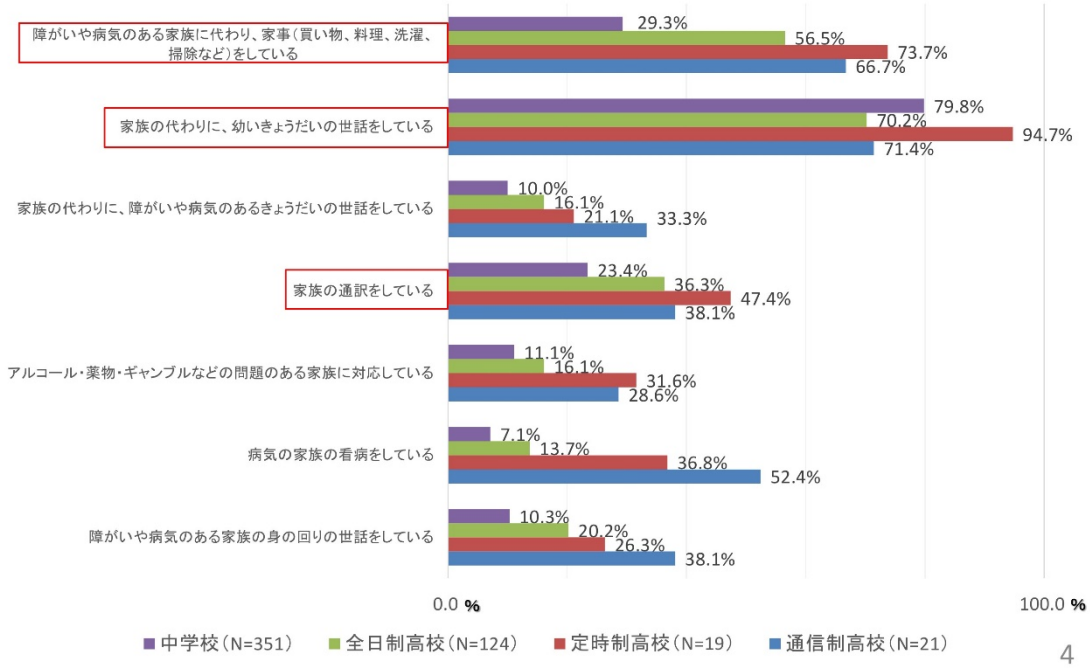
学校調査結果①

○　学校に対し、ヤングケアラーの定義（２ページ参照）に該当すると思われる子どもの有無について質問。
○　いずれの学校種でも「いる」が最も高く、定時制高校で70.4%、通信制高校で60.0%であった。



学校調査結果②

○　ヤングケアラーと思われる子どもが「いる」と回答した学校に、子どもの状況について質問（複数回答）。
○　いずれの学校種でも、「家族の代わりに、幼いきょうだいの世話をしている」が最も高い。次いで「障がいや病気のある家族に代わり、家事（買い物、料理、洗濯、掃除など）をしている」が多い。
○　全日制高校では「家族の通訳をしている」が３～４割程度みられた。



出典：「ヤングケアラーの支援に向けた福祉・介護・医療・教育の連携プロジェクト」第２回会議資料

２．中高生調査結果

（１）世話をしている家族の有無

中高生に対し、世話をしている家族の有無について質問したところ、世話をしている家族が「いる」と回答したのは、中学２年生で 5.7%、全日制高校２年生で 4.1%、定時制高校２年生相当で 8.5%、通信制高校生で 11.0%であった。

（２）世話を必要としている家族

世話をしている家族が「いる」と回答した中高生に、世話を必要としている家族について質問したところ、いずれの学校種でも「きょうだい」の割合が最も多く、特に、中学２年生は「きょうだい」の割合が他に比べ多い。ただし、以降の質問で、幼い妹や弟の世話をしていることが判明しており、一般的な世話の範囲なのかどうかは、今回の調査だけでは判別できない。

（３）父母の状況

世話を必要としている家族として「父母」と回答した中高生に、父母の状況を質問したところ、中学２年生、全日制高校２年生は「身体障がい」がそれぞれ 20.0%、15.4%と最も多く、次いで「精神疾患、依存症（疑い含む)」がそれぞれ 17.3%、14.3%となっている。通信制高校生では、サンプル数が少ない（16 人）が、「精神疾患、依存症（疑い含む)」が 62.5%と突出しており、留意が必要である。

（４）父母に対する世話の内容

世話を必要としている家族として「父母」と回答した中高生に、世話の内容について質問したところ、いずれの学校種においても、「家事食事の準備や掃除、洗濯)」が最も多い（約７割)。次いで、中学２年生、全日制高校２年生では、「外出の付き添い（買い物、散歩など)」が、それぞれ 38.7%、26.4%、定時制高校２年生相当、通信制高校生では、「感情面のサポート（愚痴を聞く、話し相手になるなど)」が、それぞれ 36.4%、56.3%となっている。

（５）祖父母の状況

世話を必要としている家族として「祖父母」と回答した中高生に、祖父母の状況を質問したところ、いずれの学校種でも「高齢 65 歳以上)」が最も多い。

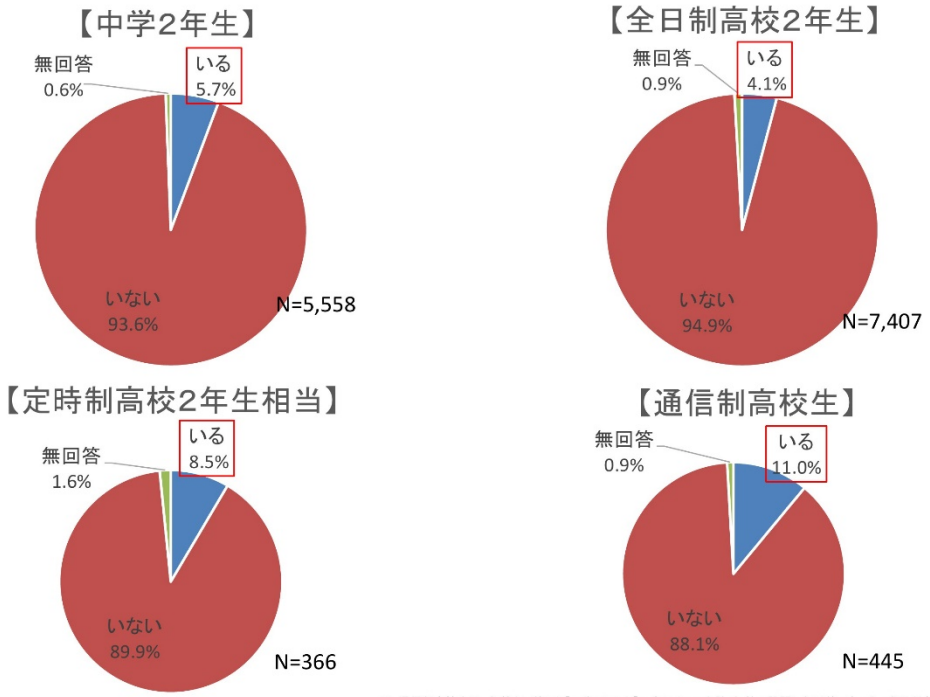
また、「要介護（介護が必要な状態)」は、中学２年生 27.7%、全日制高校２年生 33.3%、「認知症」は、中学２年生 19.1%、全日制高校２年生 23.2%と多く、通信制高校生では、「認知症」36.4%、「身体障がい」27.3%と多い。

（６）祖父母に対する世話の内容

世話を必要としている家族として「祖父母」と回答した中高生に、世話の内容を質問したところ、「見守り」「家事（食事の準備や掃除、洗濯)」が多い。

中高生調査結果①

○　中高生に対し、世話をしている家族の有無について質問。
○　世話をしている家族が「いる」と回答したのは中学２年生で5.7%、全日制高校２年生で4.1%、定時制高校２年生相当で8.5%、通信制高校生で11.0%。

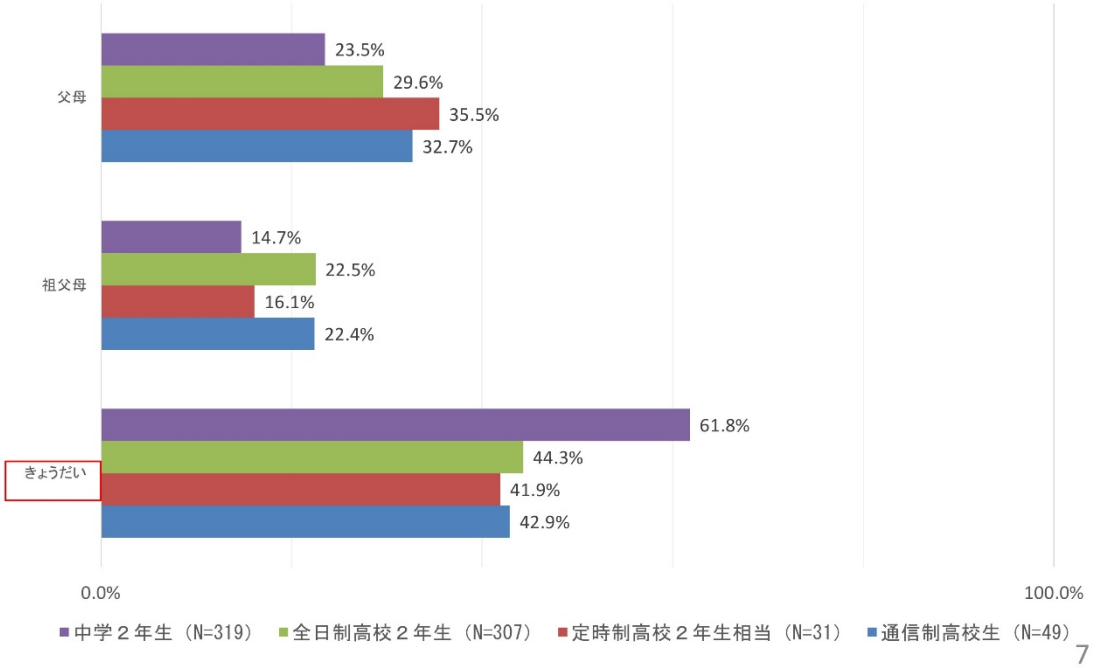


※　通信制高校生は、年齢を回答した「18歳以下」と「19歳以上」の合計（年齢の設問に無回答であった1名は対象外）。
19歳以上は「いた（現在はお世話をしていない）」、「現在まで継続してお世話をしている」が「いる」に含まれる。

6

中高生調査結果②

○　世話をしている家族が「いる」と回答した中高生に、世話を必要としている家族について質問（複数回答）。
○　いずれの学校種でも「きょうだい」が最も高い。特に、中学２年生は「きょうだい」の割合が他に比べ多い。

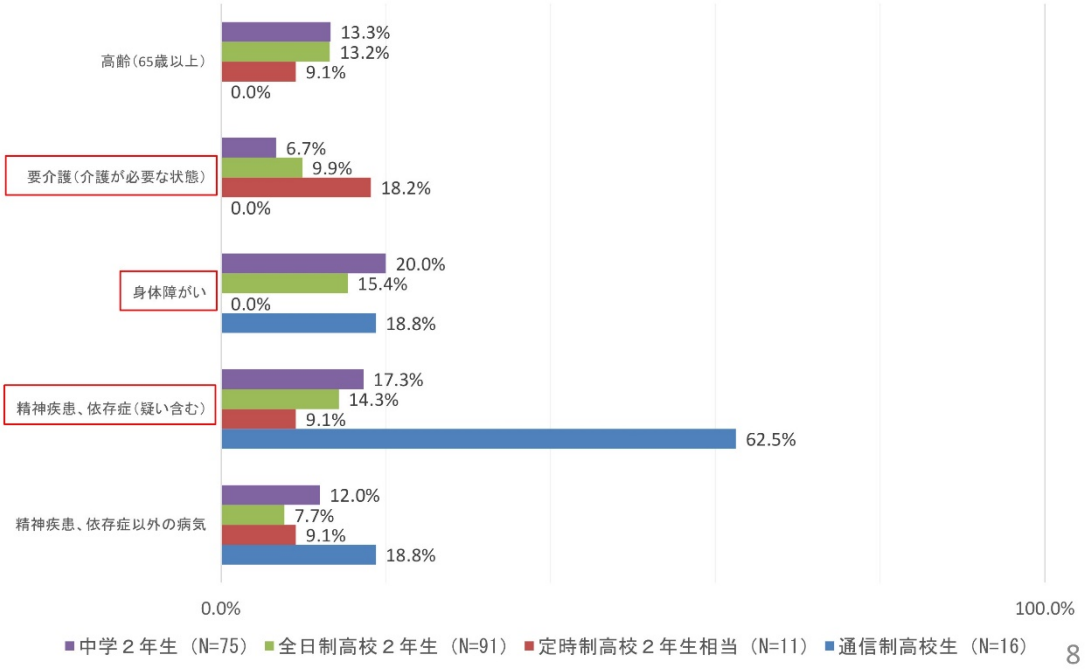


7

出典：「ヤングケアラーの支援に向けた福祉・介護・医療・教育の連携プロジェクト」第２回会議資料

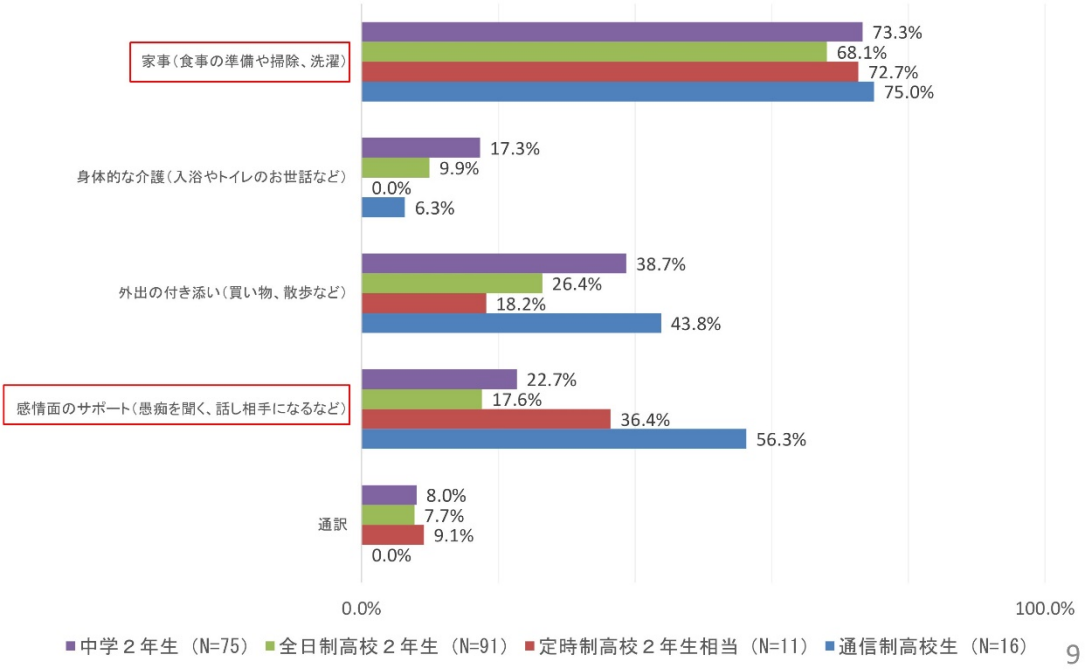
中高生調査結果③

○　世話を必要としている家族として「父母」と回答した中高生に、父母の状況を質問（複数回答）。
○　中学２年生、全日制高校２年生は「身体障がい」が最も高い。



中高生調査結果④

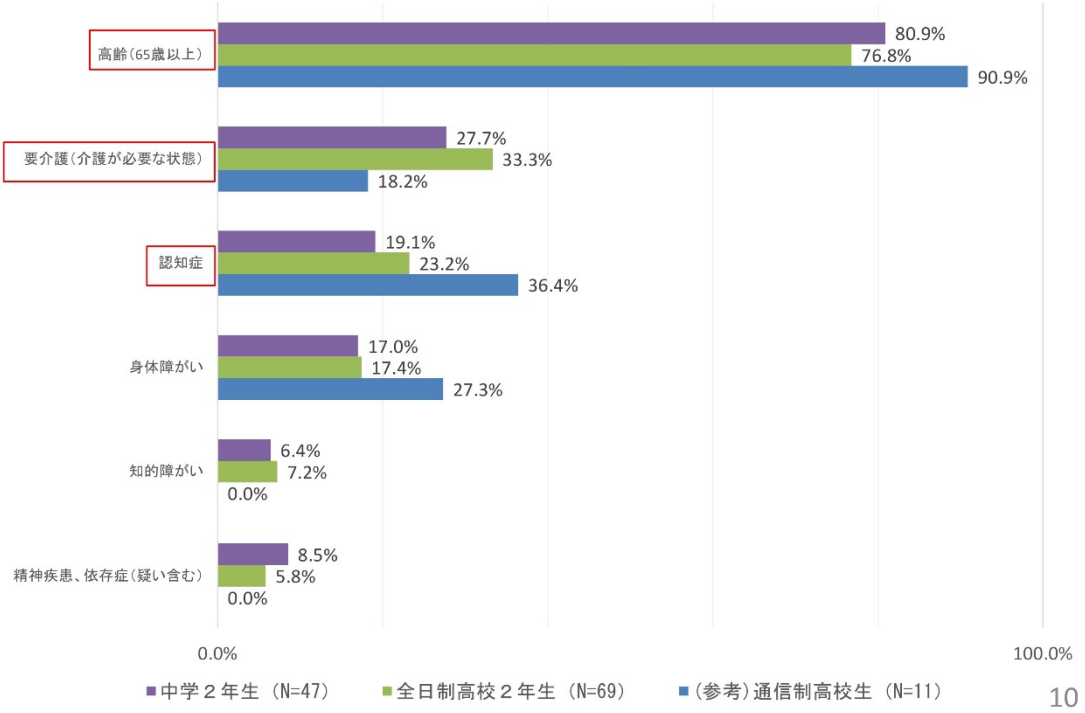
○　世話を必要としている家族として「父母」と回答した中高生に、世話の内容について質問（複数回答）。
○　いずれの学校種においても、「家事（食事の準備や掃除、洗濯）」が最も高い。



出典：「ヤングケアラーの支援に向けた福祉・介護・医療・教育の連携プロジェクト」第２回会議資料

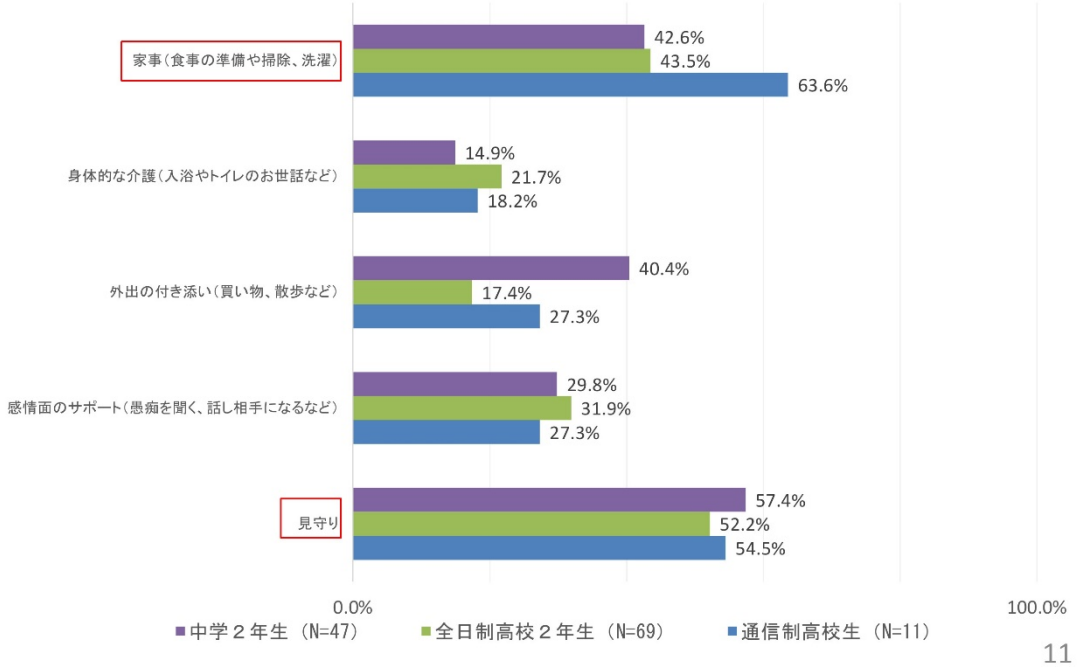
中高生調査結果⑤

○　世話を必要としている家族として「祖父母」と回答した中高生に、祖父母の状況を質問（複数回答）。
○　いずれの学校種でも「高齢（65歳以上）」が最も高く、「要介護（介護が必要な状態）」、「認知症」も多い。



中高生調査結果⑥

○　世話を必要としている家族として「祖父母」と回答した中高生に、世話の内容を質問（複数回答）。
○　中学２年生、全日制高校２年生は「見守り」が最も高い。



出典：「ヤングケアラーの支援に向けた福祉・介護・医療・教育の連携プロジェクト」第２回会議資料

（７）きょうだいの状況

世話を必要としている家族として「きょうだい」と回答した中高生に、きょうだいの状況を質問したところ、いずれの学校種でも「幼い」が最も多い。

また、中学２年生、全日制高校２年生では、「知的障がい」が、それぞれ 14.7%、8.1%と多く、次いで「身体障がい」が、5.6%、6.6%となっている。

定時制高校２年生相当、通信制高校生では、「知的障がい」「精神疾患、依存症（疑い含む)」が多くなっている。

（８）きょうだいに対する世話の内容

世話を必要としている家族として「きょうだい」と回答した中高生に、世話の内容について質問したところ、中学２年生、定時制高校２年生相当は「見守り」が最も多く、全日制高校２年生、通信制高校生では、「家事（食事の準備や掃除、洗濯)」がそれぞれ 71.4%、56.6%と多くなっている。

（９）世話をする頻度

世話をしている家族が「いる」と回答した中学２年生について、世話をしている家族ごとに世話の頻度を集計すると、「父母」については、「ほぼ毎日」(37.3%)、「週に３～５日」(14.7%)、合わせると５割強となっている。「祖父母」については、「ほぼ毎日」(31.9%)、「週に３～５日」(21.3%) で、同様に合わせると５割強となっている。

世話をしている家族が「いる」と回答した全日制高校２年生について、世話をしている家族ごとに世話の頻度を集計すると、「父母」については、「ほぼ毎日」(38.5%)、「週に３～５日」(18.7%)、合わせると６割弱となっている。「祖父母」については、「ほぼ毎日」(44.9%)、「週に３～５日」(21.7%) で、合わせると７割弱となっており、週３日以上世話をしているという生徒の割合が、中学２年生より多くなっている。

なお、「きょうだい」については、「ほぼ毎日」世話をしている割合が多い。

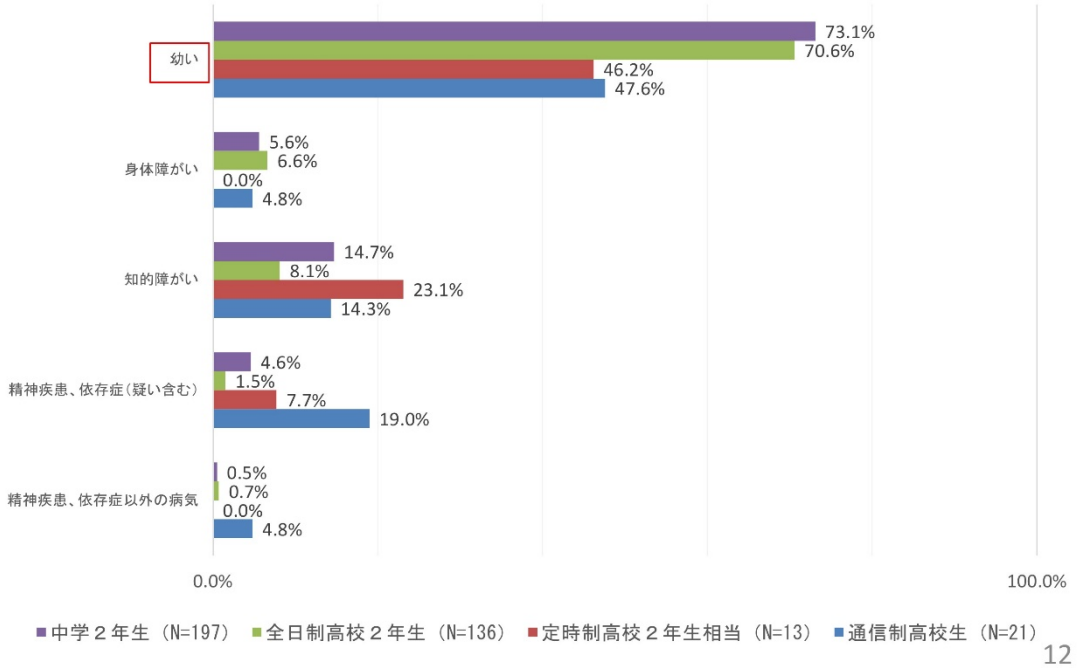
(10) 平日１日あたりに世話に費やす時間

世話をしている家族が「いる」と回答した中高生に、平日１日あたりに世話に費やす時間について質問したところ、いずれの学校種でも「７時間以上」世話に費やしているの生徒は約１～２割、「３～７時間未満」の生徒は２～３割となっており、合わせると通信制高校では約 65%、それ以外の校種では約 30～35%となっている。

なお、学校種別平均時間は、中学２年生は 4.0 時間、全日制高校２年生は 3.8 時間となっている。

中高生調査結果⑦

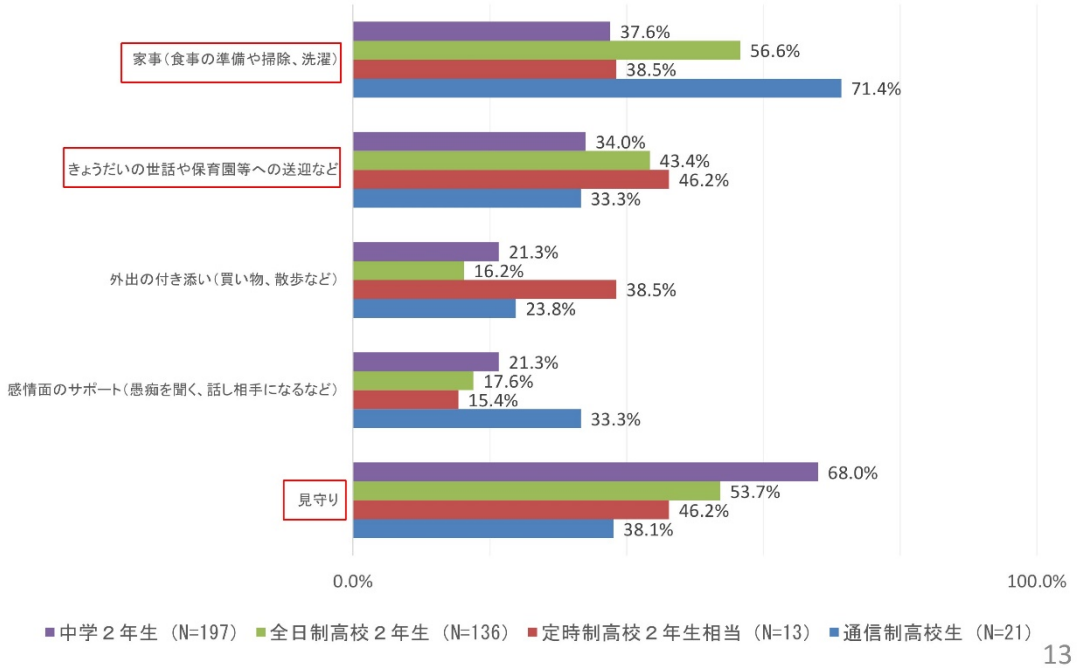
○　世話を必要としている家族として「きょうだい」と回答した中高生に、きょうだいの状況を質問（複数回答）。
○　いずれの学校種でも「幼い」が最も高い。次いで「知的障がい」の割合は１～２割程度。



12

中高生調査結果⑧

○　世話を必要としている家族として「きょうだい」と回答した中高生に、世話の内容について質問（複数回答）。
○　中学２年生、定時制高校２年生相当は「見守り」が最も高い。



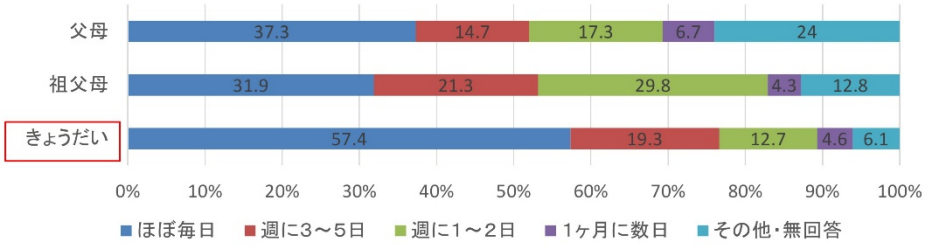
13

出典：「ヤングケアラーの支援に向けた福祉・介護・医療・教育の連携プロジェクト」第２回会議資料

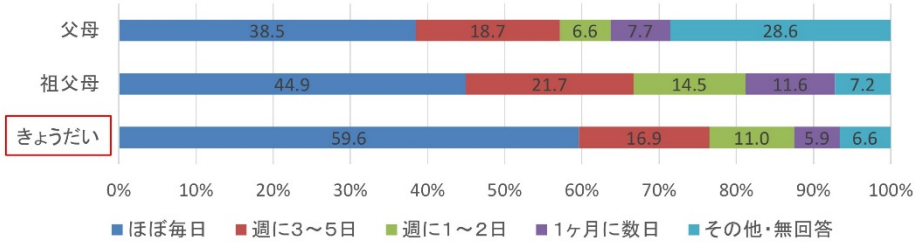
中高生調査結果⑩

○　世話をしている家族が「いる」と回答した中高生（※）に、世話をしている家族ごとに頻度を質問。
○　「きょうだい」については「ほぼ毎日」世話をしている割合が高い（約６割）。
※　定時制高校２年生相当及び通信制高校生は対象者数が少ないため、掲載していない。

【中学2年生】　N=319



【全日制高校2年生】　N=307

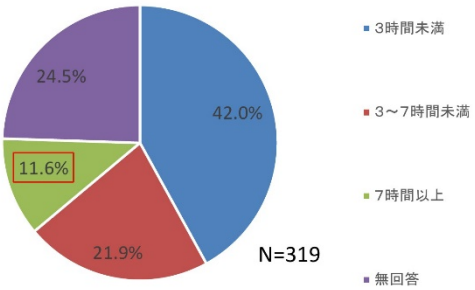


15

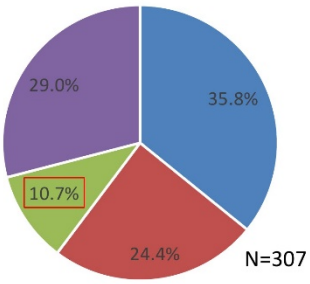
中高生調査結果⑪

○　世話をしている家族が「いる」と回答した中高生に、平日１日あたりに世話に費やす時間について質問。
○　いずれの学校種でも７時間以上世話に費やしているのが約１～２割。
○　学校種別平均は、中学２年生は4.0時間、全日制高校２年生は3.8時間。

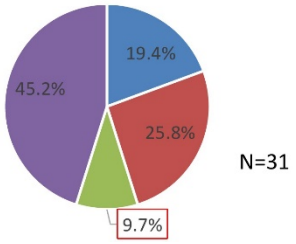
【中学2年生】



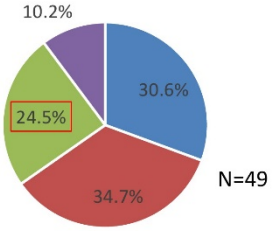
【全日制高校2年生】



【定時制高校2年生相当】



【通信制高校生】



16

出典：「ヤングケアラーの支援に向けた福祉・介護・医療・教育の連携プロジェクト」第２回会議資料

(11) 世話をしているために、やりたいけれどできていないこと

世話をしている家族が「いる」と回答した中高生に、世話をしているために、やりたいけれどできていないことについて質問したところ、中学２年生、全日制高校２年生、定時制高校２年生相当では 「特にない」が最も多く、次いで、「自分の時間が取れない」が多くなっている。

通信制高校生では、「自分の時間が取れない」が多く、「友人と遊ぶことができない」「授業を受ける時間や課題をする時間、勉強する時間が取れない」と続く。

(12) 世話について相談した経験の有無について質問

世話をしている家族が「いる」と回答した中高生に、世話について相談した経験の有無について質問したところ、いずれの学校種でも、相談した経験が「ある」が２～３割、「ない」が５～６割となっている。

(13) 相談相手

世話について相談した経験が「ある」と回答した中高生に、相談相手について質問したところ、「家族（父、母、祖父、祖母、きょうだい)」が最も多く、次いで「友人」が多い。「学校の先生（保健の先生以外)」や「ＳＮＳ上での知り合い」も１割前後あった。

(14) 相談した経験が「ない」理由

世話について相談した経験が「ない」と回答した中高生に、その理由について質問したところ、「誰かに相談するほどの悩みではない」が最も多く、次いで「相談しても状況が変わるとは思わない」が多い。

(15) 必要な支援

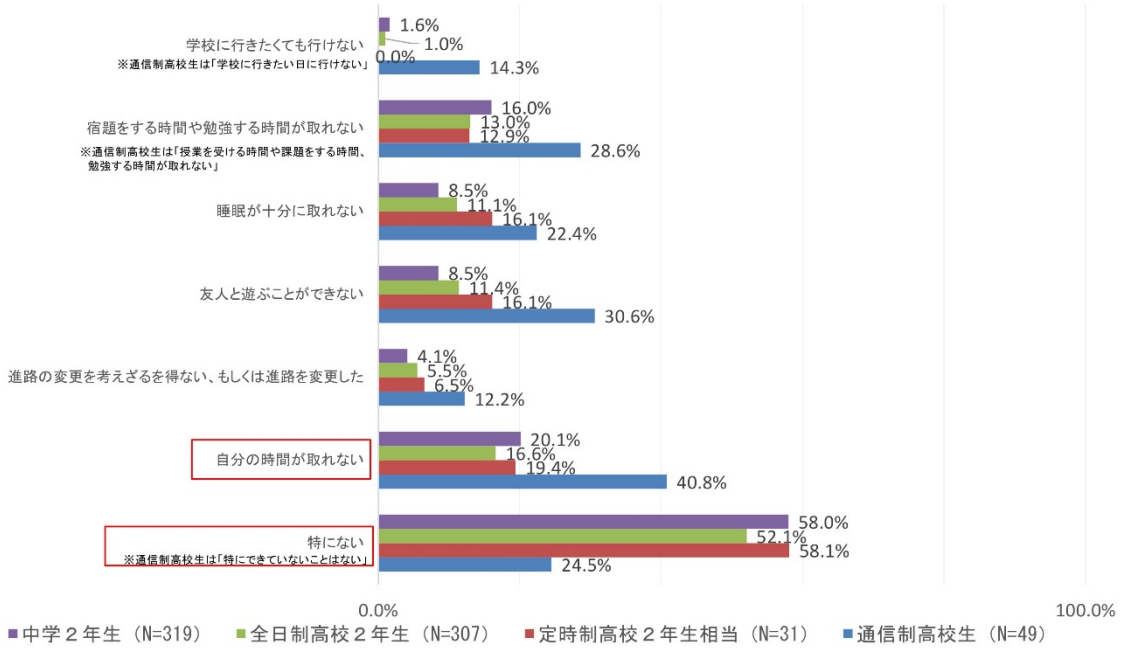
世話をしている家族が「いる」と回答した中高生に、学校や大人に助けてほしいこと、必要な支援について質問したところ、通信制高校生を除き、「特にない」が約４割で最も多く、それ以外の校種では、「学校の勉強や受験勉強など学習のサポート」、「自由に使える時間がほしい」が多い。

(16) ヤングケアラーとして認識

中高生に対し、自分がヤングケアラーにあてはまると思うかについて質問したところ、中学２年生、全日制高校２年生では、「あてはまる」が約 2%、定時制高校２年生相当では 4.6%、通信制高校生は 7.2%であった。また、いずれの学校種でも「わからない」が１～２割程度であった。

中高生調査結果⑬

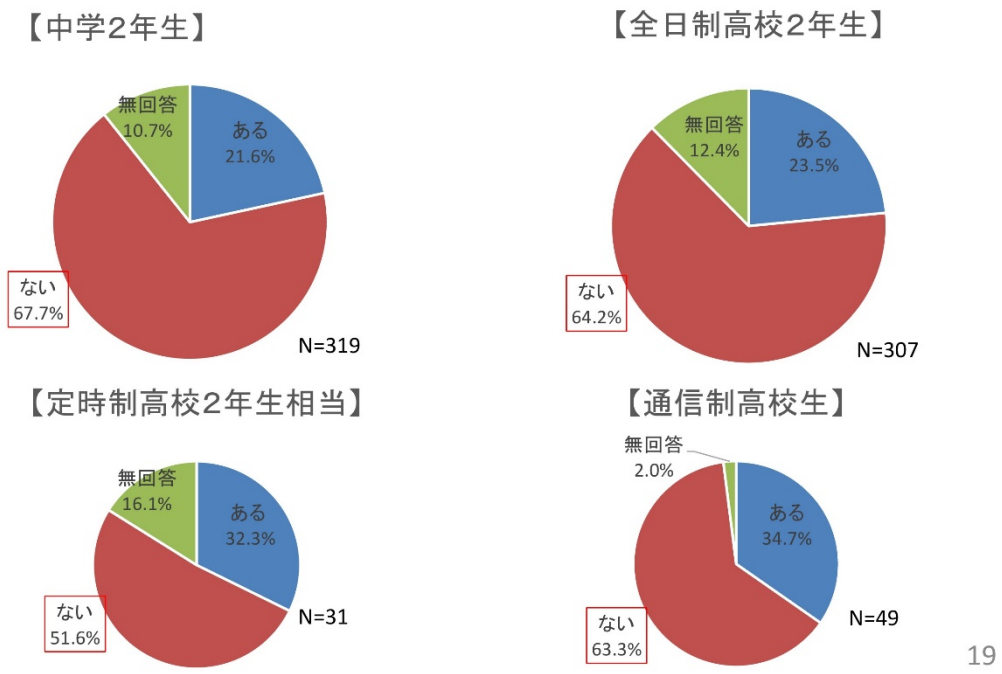
○　世話をしている家族が「いる」と回答した中高生に、世話をしているために、やりたいけれどできていないことについて質問。
○　中学２年生、全日制高校２年生では「特にない」が最も高くなっているが、その他では、「自分の時間が取れない」が最も高くなっている。



18

中高生調査結果⑭

○　世話をしている家族が「いる」と回答した中高生に、世話について相談した経験の有無について質問。
○　いずれの学校種でも、相談した経験が「ある」が２～３割、「ない」が５～６割。

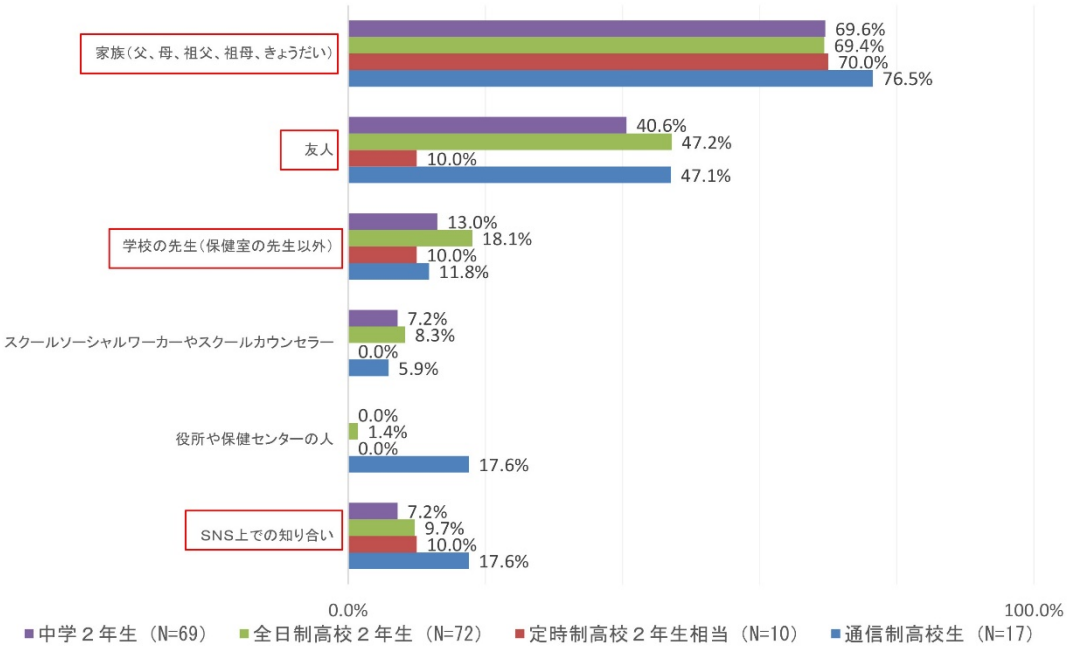


19

出典：「ヤングケアラーの支援に向けた福祉・介護・医療・教育の連携プロジェクト」第２回会議資料

中高生調査結果⑮

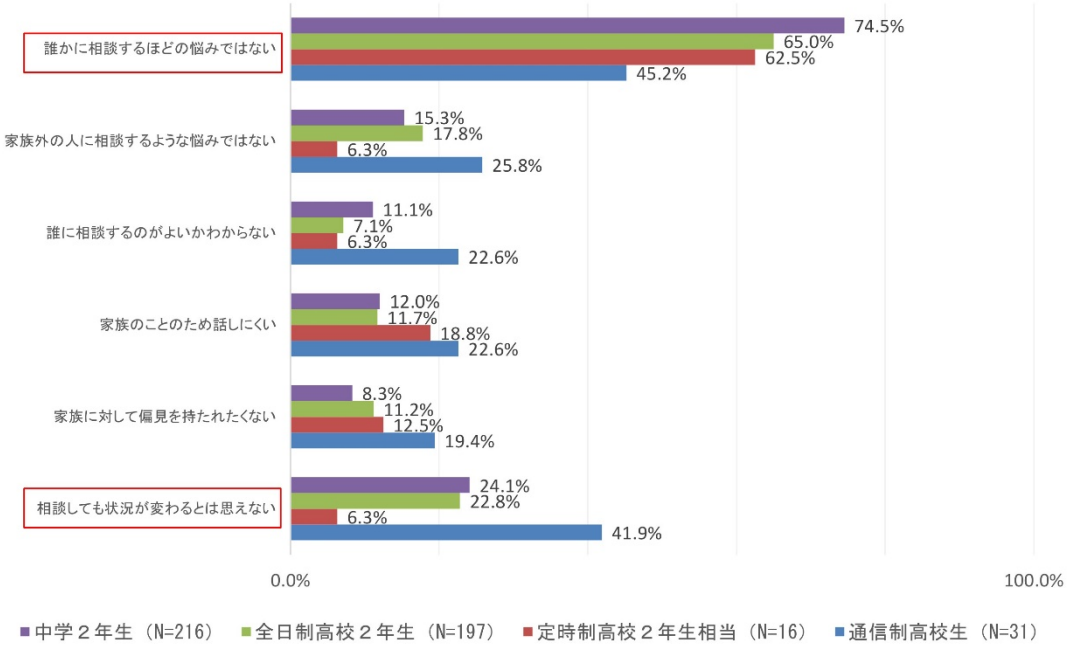
○　世話について相談した経験が「ある」と回答した中高生に、相談相手について質問。
○　「家族（父、母、祖父、祖母、きょうだい）」が最も高く、次いで「友人」が高い。
○　「学校の先生（保健の先生以外）」や「ＳＮＳ上での知り合い」も１割前後あった。



20

中高生調査結果⑯

○　世話について相談した経験が「ない」と回答した中高生に、その理由について質問。
○　「誰かに相談するほどの悩みではない」が最も高く、次いで、「相談しても状況が変わるとは思わない」が高い。

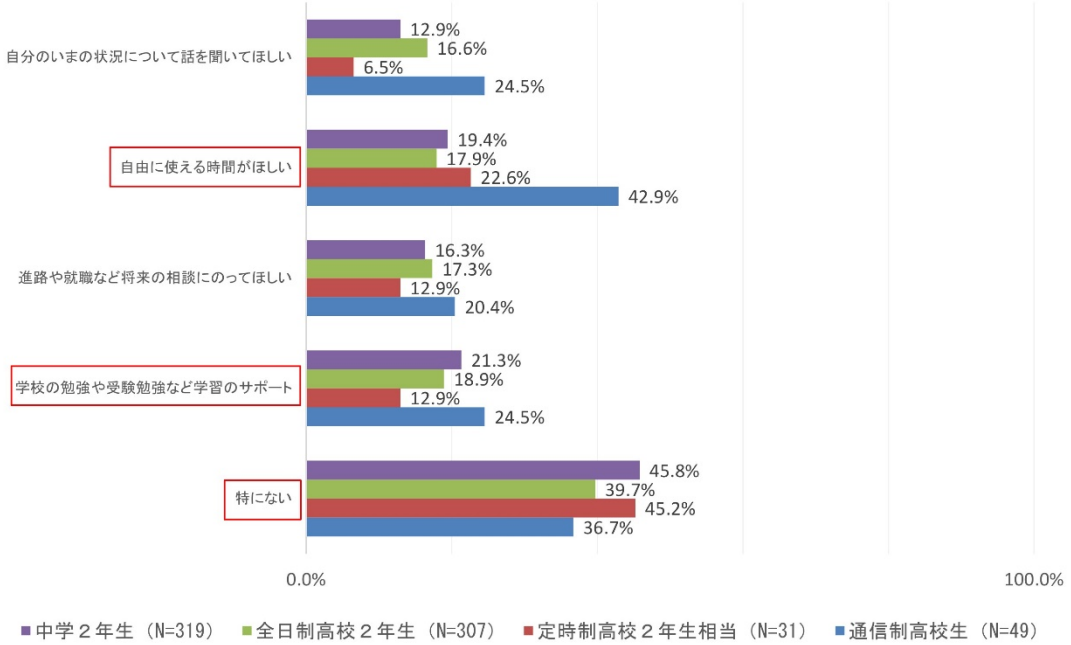


21

出典：「ヤングケアラーの支援に向けた福祉・介護・医療・教育の連携プロジェクト」第２回会議資料

中高生調査結果⑰

○　世話をしている家族が「いる」と回答した中高生に、学校や大人に助けてほしいこと、必要な支援について質問（複数回答）。
○　通信制高校生を除き、「特にない」が約４割で最も高い。それ以外では「学校の勉強や受験勉強など学習のサポート」、「自由に使える時間がほしい」が高い。

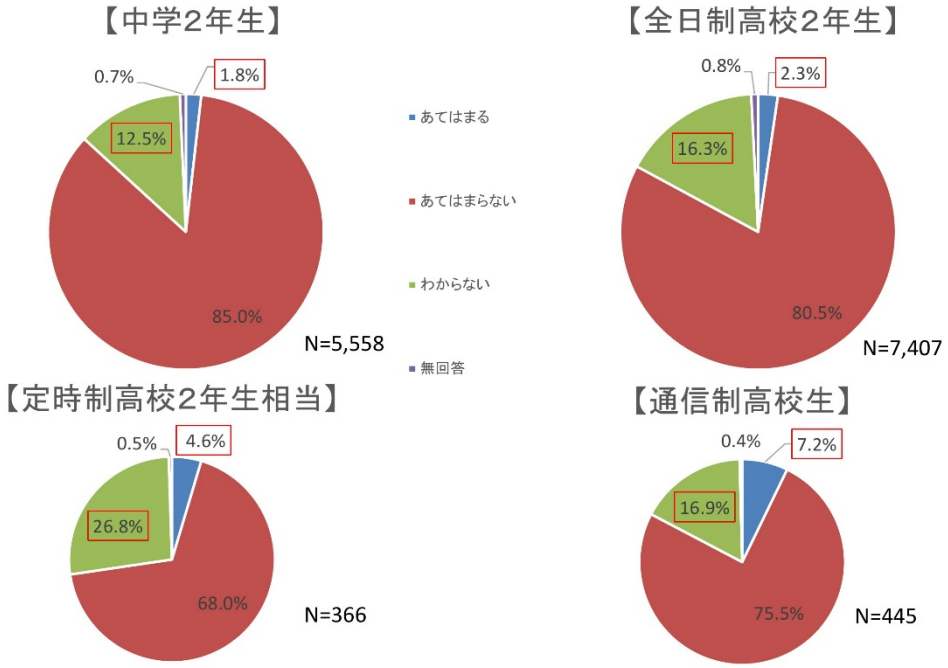


※　通信制高校生は「18歳以下」と「19歳以上」の合計。

22

中高生調査結果⑱

○　中高生に対し、自分がヤングケアラーにあてはまると思うかについて質問。
○　中学２年生、全日制高校２年生では「あてはまる」が約2%、定時制高校２年生相当は4.6%、通信制高校生は7.2%。
○　いずれの学校種でも「わからない」が１～２割。



23

出典：「ヤングケアラーの支援に向けた福祉・介護・医療・教育の連携プロジェクト」第２回会議資料

１－４．埼玉県ケアラー支援計画のためのヤングケアラー実態調査結果の概要

資料：埼玉県ケアラー支援に関する有識者会議　第３回資料

埼玉県では、ヤングケアラーの実態が不明なため、潜在化しているヤングケアラーの存在を把握し、ケアの状況、ヤングケアラーへの影響、困りごと、支援ニーズ等を把握し、計画の策定に役立てることを目的に、ヤングケアラー実態調査を行った。

調査期間は、令和２年７月 21 日～令和２年９月 11 日である。

主な調査項目は、「ケアラー自身について」「ケアの状況について」「ケアの影響について」「ケアに関する相談について」「求める支援について」などとし、埼玉県内県立高校、市立高校、国立高校、県立高校定時制、市立高校定時制、私立高校計 193 校に対して行った。

調査対象は、調査時点の高校２年生 55,772 人、回答者数 48,261 人、回収率 86.5%である。

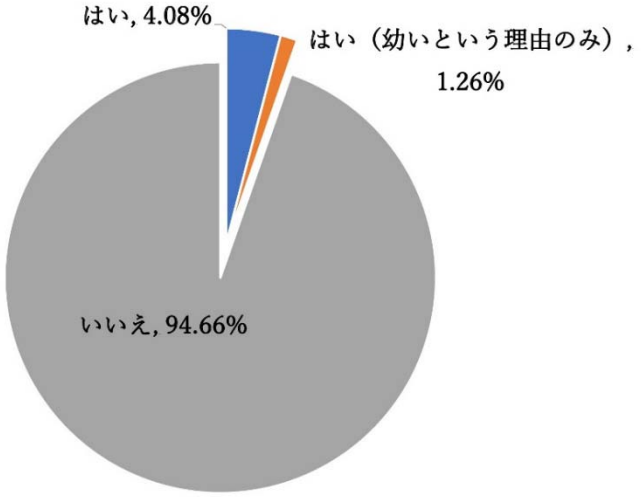
調査結果の概要は、以下の通りである。

なお、分析に当たっては、自身がヤングケアラーである、または過去にそうであったと思うかについて、回答者 48,261 名の内、「はい」と回答したのは、2,577 名 5.3%であったが、障害や病気などではなく、ケアの相手が幼いという理由のみでケアをしている方 608 名をヤングケアラーと見なすかどうか判断が難しいことから、調査では除外することとし、残りの 1,969 名 4.1%をヤングケアラーの対象者としている。

１．ヤングケアラーの属性

「ヤングケアラーである・過去にヤングケアラーであった」とする者は、ケアの相手が「幼い（未就学・小学生）」という理由のみでケアしている者を除くと、4.1%（1,969 人）である。また、ヤングケアラー本人の性別は、「女性」が 58.9%で約６割を占めている。

図表1-1.「ヤングケアラー」の存在割合



注）本集計は県内高校2年生（48261人）に対して行われている。

© 2020 Saitama Prefecture. All Rights Reserved.

出典：埼玉県ケアラー支援に関する有識者会議　第３回資料

２．被介護者の属性

ケアをしている相手は、「父母」35.1%、「祖父母」33.9%で多い。

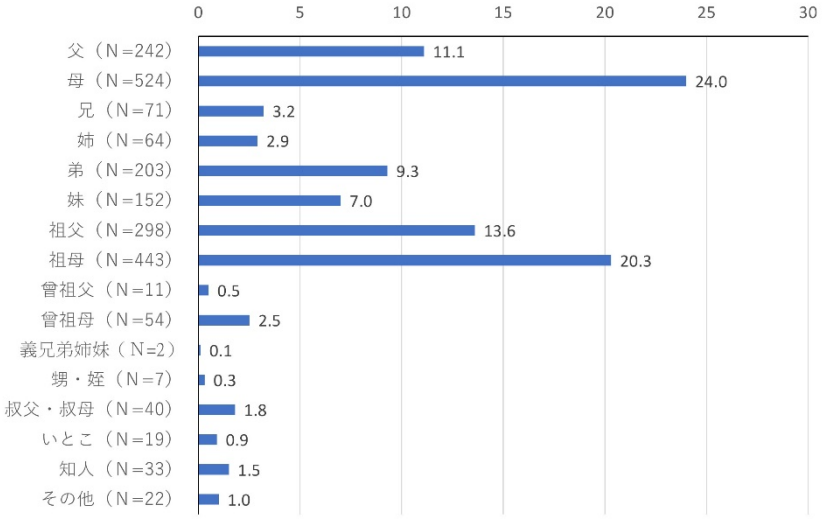
ケアの状況としては「病気」28.6%が最も多く、次いで「高齢による衰弱」20.4%となっている。

２－１　被介護者の続柄

● 被介護者(N=2,185)の、ヤングケアラーとの関係(続柄)をみると、「母」（N=524）が24.0%と最も高く、次いで「祖母」（N=443）が20.3%、「祖父」（N=298）が13.6%、「父」（N=242）が11.1%の順であった。

図表2-1. 被介護者の続柄(複数回答)

単位：%



注)本集計は被介護者数(2,185人)に対して行っている。

Ⓒ 2020 Saitama Prefecture. All Rights Reserved.

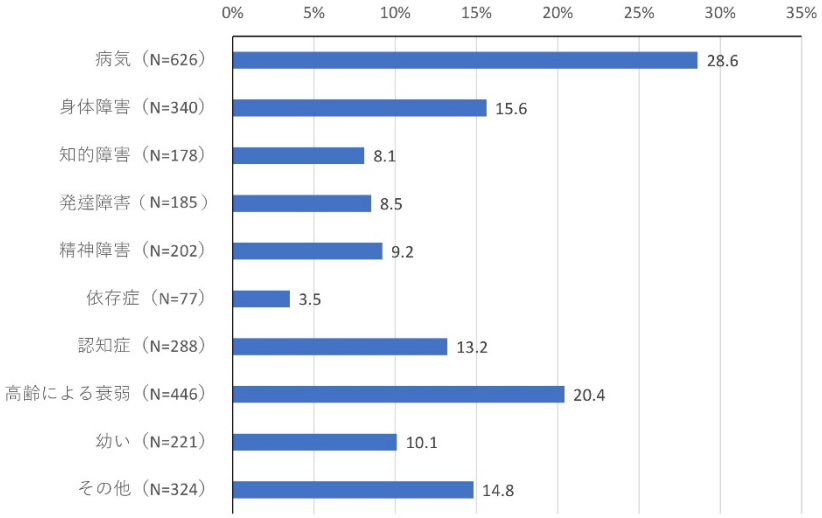
8

２－３　被介護者の状況

● 被介護者の状況（N=2,185）をみると、「病気」（N=626）が28.6%と最も高く、次いで「高齢による衰弱」（N=446）20.4%、「身体障害」（N=340）15.6%、「その他」（N=324）14.8%の順であった。

図表2-3. 介護が必要になった主な原因(複数回答)

単位：%



注)本集計は被介護者数(2,185人)に対して行っている。

Ⓒ 2020 Saitama Prefecture. All Rights Reserved.

10

出典：埼玉県ケアラー支援に関する有識者会議　第３回資料

３．ケアの状況

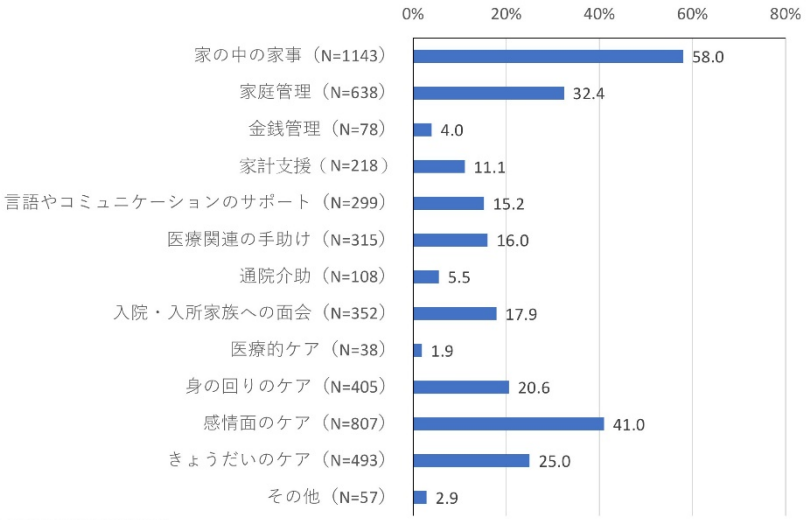
ケアの内容は「家の中の家事」58.0%、「感情面のケア」41.0%と多い。
ケアの頻度は「毎日」35.3%が最も多く、「週 4～5 日」を含めると、過半数に上る。

３－１　ヤングケアラーが行っているケアの内容

● ヤングケアラーが行っているケアの内容（N=1,969）をみると、「家事(食事の用意・後片付け・洗濯・掃除など)」（N=1,143）が58.0%と最も高く、次いで「感情面のケア(その人のそばにいる・元気づける・話しかける・見守る・外に連れ出したりするなど)」（N=807）41.0%、「家庭管理(買い物・家の修理仕事・重いものを運ぶなど)」（N=638）32.4%、「きょうだいのケア」（N=493）25.0%の順であった。

図表3-1. ヤングケアラーが行っているケアの内容(複数回答)

単位：%



注)本集計はヤングケアラー本人(1,969人)に対して行っている。

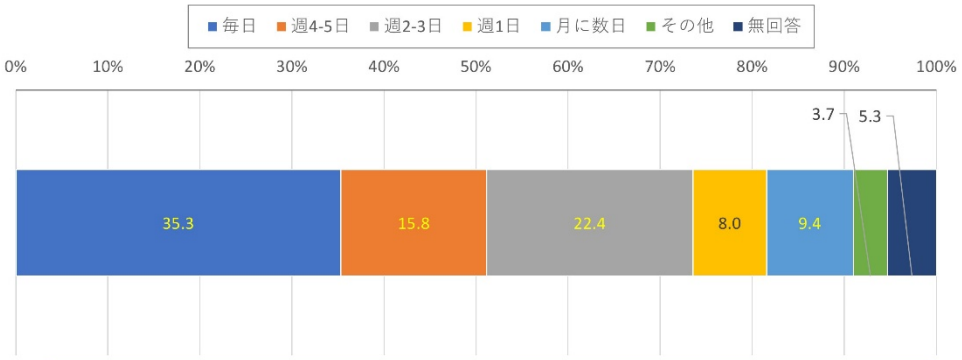
Ⓒ 2020 Saitama Prefecture. All Rights Reserved.

13

３－２　ケアをしている頻度

● ケアの頻度をみると、「毎日」（N=696）が35.3%と最も高く、次いで「週2-3日」（N=441）22.4%、「週4-5日」（N=312）15.8%の順であった。

図表3-2. ケアをしている頻度の割合



	毎日	週4~5日	週2~3日	週1日	月に数日	その他	無回答
ケアラー総数（N=1969）	696	312	441	157	186	72	105
割合（%）	35.3	15.8	22.4	8.0	9.4	3.7	5.3

注)本集計はヤングケアラー本人(1,969人)に対して行っている。

Ⓒ 2020 Saitama Prefecture. All Rights Reserved.

14

出典：埼玉県ケアラー支援に関する有識者会議　第３回資料

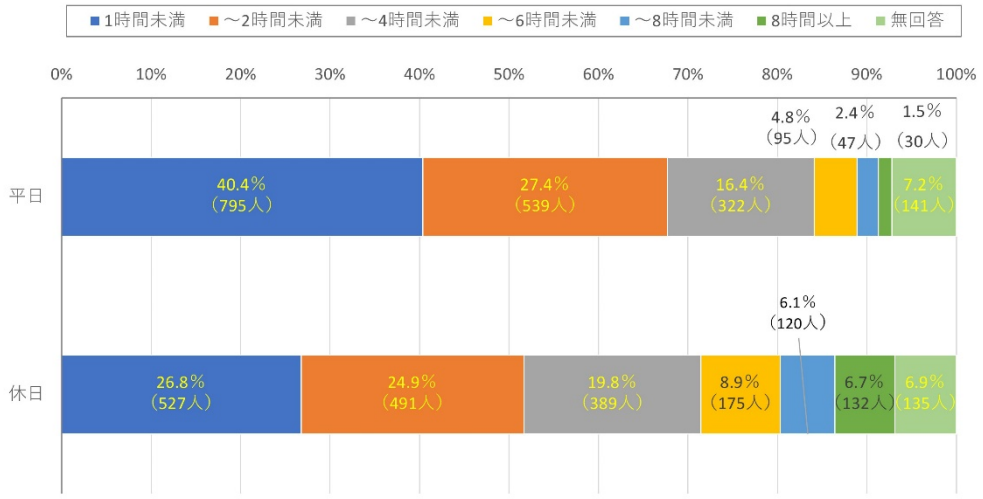
ケアの時間は、学校のある平日については「1 時間未満」40.4%、休日については「1 時間未満」26.8%が最も多い。一方、時間について「2 時間以上」とする者は、平日 25.1%、休日 41.4%と、休日はさらにケアが長時間化する傾向がみられる。

ケアをしている理由については、「親が仕事で忙しいため」29.7%が最も多く、次いで「親の病気など」20.7%と続く。

3－3　ケアにかける時間（平日･休日）

- ケアにかける時間（N=1,969）をみると、平日は「1時間未満」（N=795）が40.4%と最も高く、次いで「1時間以上2時間未満」（N=539）27.4%と、2時間未満が全体の約7割を占めていた。
- 休日も平日同様、「1時間未満」（N=527）が26.8%と最も高く、次いで「1時間以上2時間未満」（N=491）24.9%の順であったが、その割合は約5割に減少しており、平日に比べると、ケアにかける時間がより長くなっていた。

図表3-3. ケアにかける時間の割合



注)本集計はヤングケアラー本人(1,969人)に対して行っている。

Ⓒ 2020 Saitama Prefecture. All Rights Reserved.

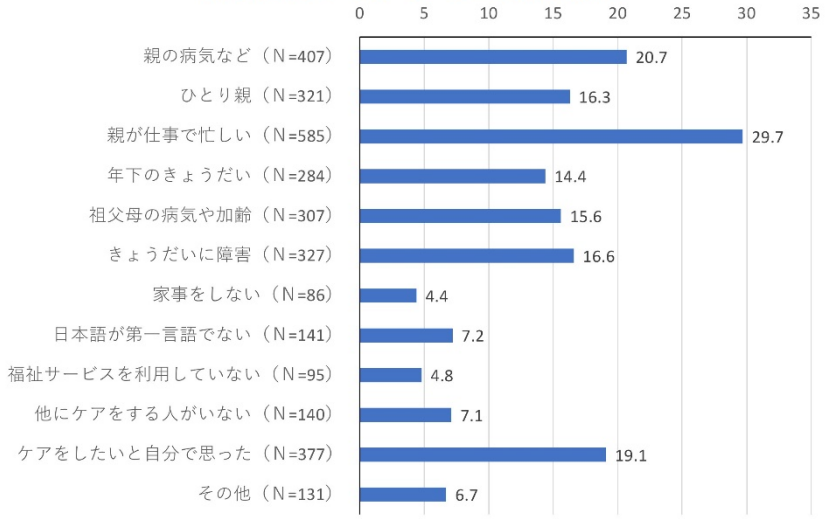
15

3－5　ケアをしている理由

- ケアをしている理由(N=1,969)をみると、「親が仕事で忙しい」(N=585)が29.7%で最も高く、次いで「親の病気や障害等のため」(N=407)が20.7%、「ケアをしたいと自分で思ったため」(N=377)が19.1%、「きょうだいに障害があるため」(N=327)が16.6%の順であった。

図表3-5. ケアをしている理由(複数回答)

単位：%



注)本集計はヤングケアラー本人(1,969人)に対して行われている。

Ⓒ 2020 Saitama Prefecture. All Rights Reserved.

19

出典：埼玉県ケアラー支援に関する有識者会議　第３回資料

４．ケアの影響

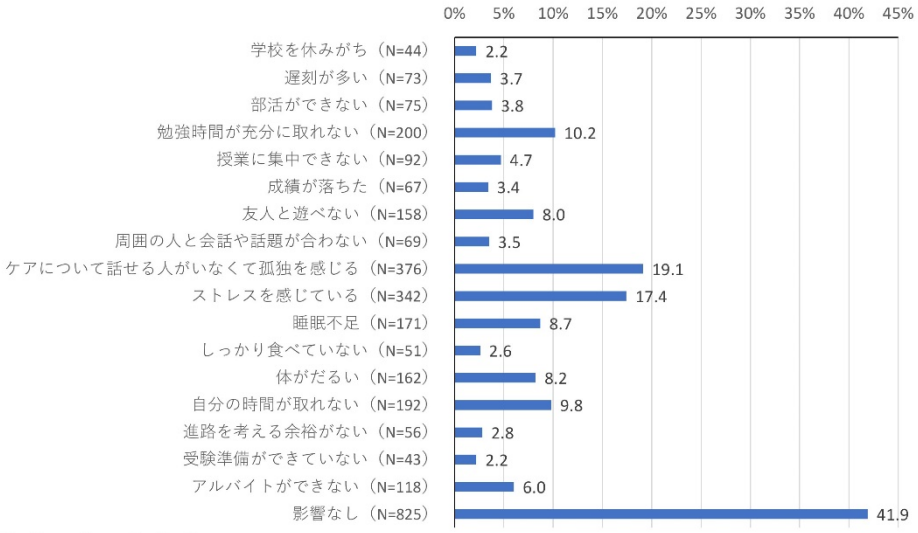
学校生活への影響については、「特に影響はない」41.9%で最も多いが、一方「ケアについて話せる人がいなくて、孤独を感じる」19.1%、「ストレスを感じている」17.4%、「勉強の時間が充分に取れない」10.2%等と様々な影響を受けている者がいる。

平日の１日あたりケア時間の学校生活への影響をみると、ケア時間が長くなるほど「勉強時間が取れない」や「部活ができない」といった物理的な時間が不足することは容易に推測できるが、「ストレスを感じている」や「体がだるい」といった心身への影響がケア時間の増加とともに増加していることが懸念される。

４－１　学校生活への影響

● 学校生活への影響（N=1,969）をみると、「影響なし」（N=825）が41.9%と最も高く、次いで「孤独を感じる」（N=376）19.1%、「ストレスを感じている」（N=342）17.4%、「勉強時間が充分に取れない」（N=200）10.2%の順であった。

図表4-1. 学校生活への影響(複数回答)　　単位：%

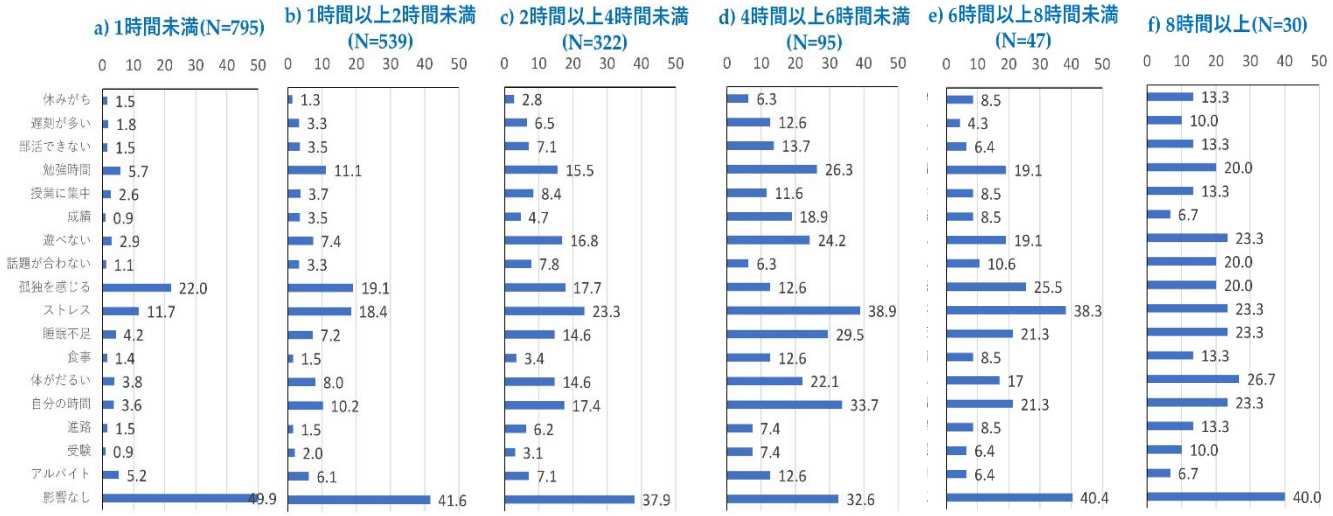


注)本集計はヤングケアラー本人(1,969人)に対して行っている。

Ⓒ 2020 Saitama Prefecture. All Rights Reserved.

22

４－１－１　１日あたりのケア時間と学校生活への影響（平日）



注)本集計はヤングケアラー本人(1,969人)に対して行っている。

Ⓒ 2020 Saitama Prefecture. All Rights Reserved.

出典：埼玉県ケアラー支援に関する有識者会議　第３回資料

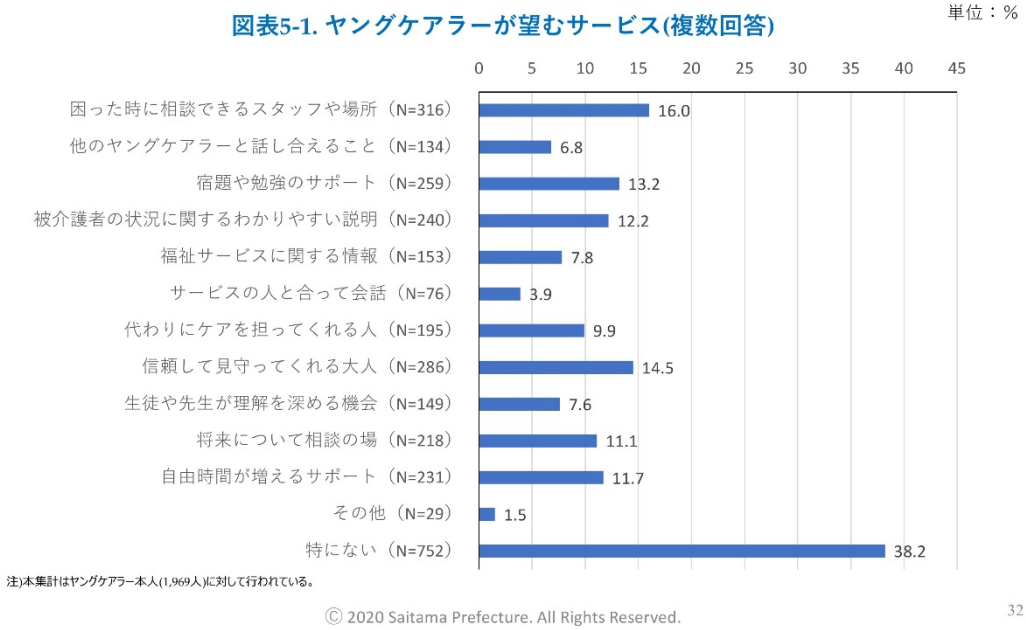
５．ヤングケアラーが望むサポート

必要とする支援は、「特にない」38.2%が最も多いが、一方「家族の病状が悪化するなど、困った時に相談できるスタッフや場所」16.0%、「信頼して見守っている大人がいること」14.5%、「学校で宿題や勉強をサポートしてくれること」13.2%など様々なサポートが求められている。

５－１　ヤングケアラーが望むサポート

● 望むサービス(N=1,969)をみると、「特にない」(N=752)が38.2%で最も高く、次いで「困った時に相談できるスタッフや場所」(N=316)が16.0%、「信頼して見守ってくれる大人」(N=286)が14.5%、「宿題や勉強のサポート」(N=259)が13.2%の順であった。

図表5-1. ヤングケアラーが望むサービス(複数回答)



注)本集計はヤングケアラー本人(1,969人)に対して行われている。

Ⓒ 2020 Saitama Prefecture. All Rights Reserved.

32

出典：埼玉県ケアラー支援に関する有識者会議　第３回資料

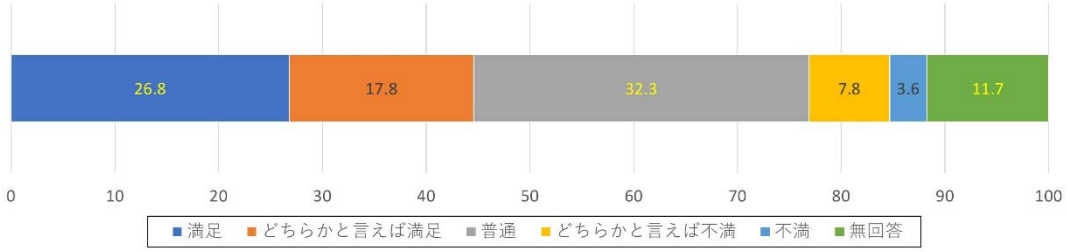
６．ヤングケアラー本人の生活満足度

生活満足度の構成割合をみると、「普通」が 32.3%で最も多く、次いで「満足」26.8%、「どちらかといえば満足」の順であった。

６－３　生活満足度

● 生活満足度(N=1,969)の構成割合をみると、「普通」(N=636)が32.3%で最も高く、次いで「満足」(N=527)が26.8%、「どちらかといえば満足」(N=351)が17.8%、「無回答」(N=230)が11.7%の順であった。

図表6-3. 生活満足度の割合



出典：埼玉県ケアラー支援に関する有識者会議　第３回資料

７．調査結果の分析

資料：埼玉県ケアラー支援に関する有識者会議　第１回資料

埼玉県ケアラー支援計画のためのヤングケアラー実態調査結果について、「埼玉県ケアラー支援に関する有識者会議」第１回会議において、成蹊大学文学部現代社会学科教授、澁谷智子氏は以下の通り分析されている。

（１）ケアにかける時間の捉え方

ケアにかける時間を見ると、学校のある平日では、１時間未満が４割、１時間以上２時間未満が３割近くいることが分かる。その一方で、学校のある平日に４時間以上と答えた高校生も 172 人いることを見逃すわけにはいかない。一般の高校生は、学校のある日は、８時には家を出て、部活があると帰ってくるのは夜７時、そこから４時間ケアを担うと自分のことができるのは夜 11 時ということになる。たとえ２時間程度であっても夜９時になってからということになる。ケア時間数の持つ意味が、実際の高校生の生活を思い浮かべたときに、結局、削るものは、睡眠時間や勉強時間というところになっていくということを具体的にイメージすることが必要である。

（２）ケアの内容と時間

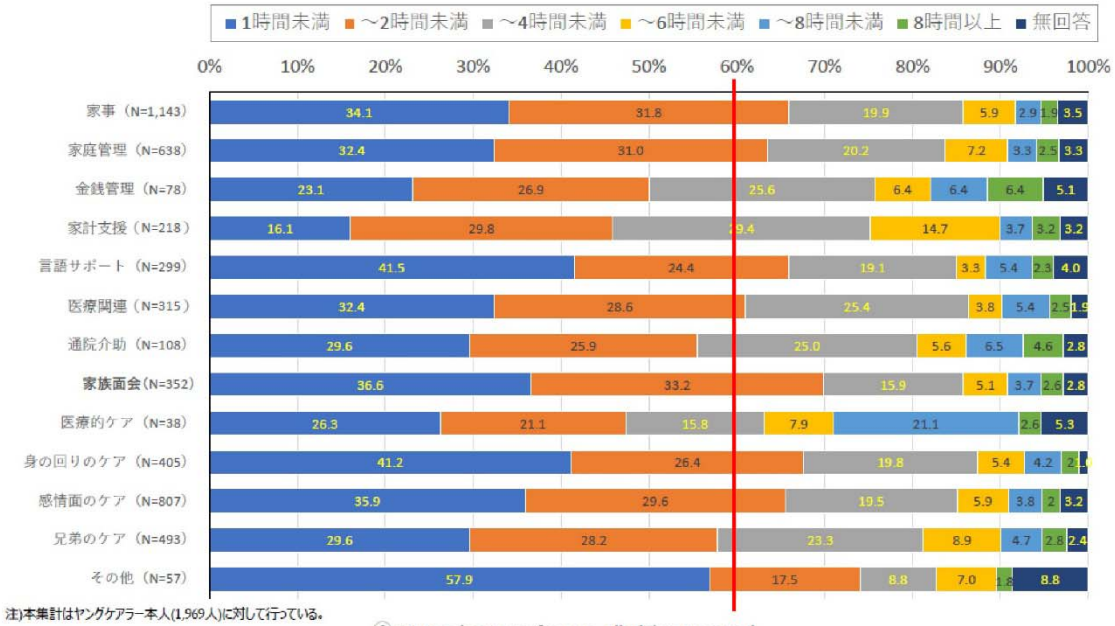
どんなケアをしている子どもがどれぐらいの時間ケアをしているかを示したグラフをみると、60％のラインで灰色以上になる、つまり平日に２時間以上のケアをしている子どもの多い項目が幾つかある。家族のためにバイトで働くなどの家計支援、経管栄養の管理やたんの吸引などの医療的ケア、請求書の支払いや銀行でのお金の出し入れなどの金銭管理、通院介助、兄弟のケアなどである。こうしたケアをしている若者たちは、かなり重い責任を負って長い時間をケアに費やしている可能性があると見ることができる。

また、子どもが行っているケアとして多いものは、家の中の家事、感情面のケアである。感情面のケアとは、例えば、認知症のおばあちゃんが「お財布を取られた」みたいなことを 30 回も 40 回も言うのに付き合ったり、あるいは、「死にたい」と泣くお母さんのそばでずっと話を聞くなどもある。

3－3－1　ケア内容別にみたケア時間（平日の場合）

● 4時間以上の割合をみると、「医療的ケア(経管栄養の管理や痰の吸引など)」が31.6%と最も高く、次いで「家計支援(バイトで働くなど)」21.6%、「金銭管理(請求書の支払い・銀行でのお金の出し入れなど)」19.2%の順であった。

図表3-3-1. ケア内容別にみた平日のケア時間の割合



注)本集計はヤングケアラー本人(1,969人)に対して行っている。

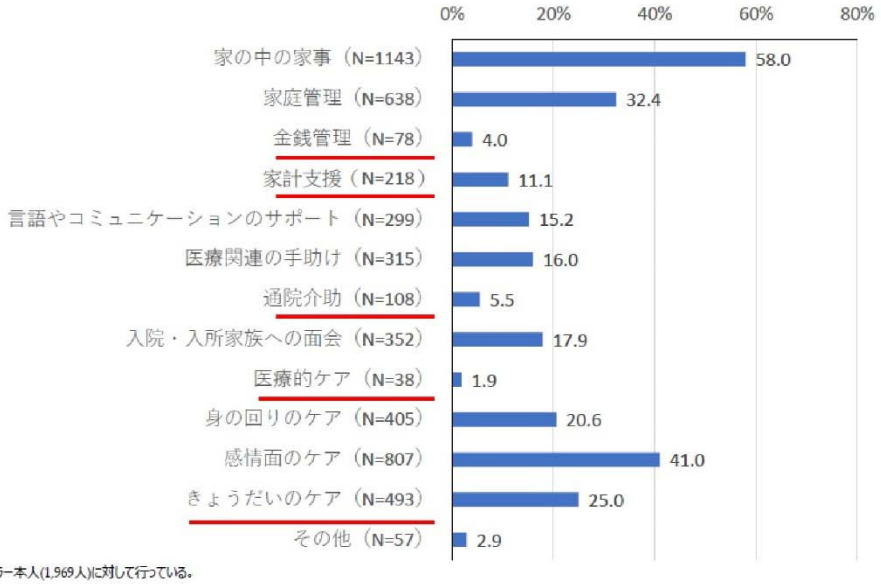
Ⓒ 2020 Saitama Prefecture. All Rights Reserved.

3－1　ヤングケアラーが行っているケアの内容

● ヤングケアラーが行っているケアの内容（N=1,969）をみると、「家事(食事の用意・後片付け・洗濯・掃除など)」（N=1,143）が58.0%と最も高く、次いで「感情面のケア(その人のそばにいる・元気づける・話しかける・見守る・外に連れ出したりするなど)」（N=807）41.0%、「家庭管理(買い物・家の修理仕事・重いものを運ぶなど)」（N=638）32.4%、「きょうだいのケア」（N=493）25.0%の順であった。

図表3-1. ヤングケアラーが行っているケアの内容(複数回答)

単位：%



注)本集計はヤングケアラー本人(1,969人)に対して行っている。

Ⓒ 2020 Saitama Prefecture. All Rights Reserved.

出典：埼玉県ケアラー支援に関する有識者会議　第１回資料

（３）ケア時間と学校生活への影響

学校のある平日の１日当たりのケア時間と学校生活への影響をみると、一番学校生活への影響が出ているとみられるのは、学校のある平日に１日４時間以上６時間未満のケアを行っている高校生たちである。この高校生たちは、勉強の時間が充分に取れないと感じ、成績が落ちたと感じ、自分の時間が取れないと感じ、睡眠不足を抱えている。遅刻はしながらも学校に行こうとし、友人と遊ぶことができない、アルバイトができない、部活ができないと感じ、ストレスも一番高い状態である。この層の人たちは、何とか学校生活との両立を図ろうと努力し、同世代の子たちと同じような生活をしようともがいている層であると言える。

１日当たり６時間以上ケアをしている層になると、ほかの子どもと同じような生活をすることを諦めて、頑張れなくなったり意欲を持てなくなったりする局面が増えてくるように考えられる。

ケア時間が多くなるとどういうところから影響が出てくるのかをみると、まず、１時間未満の人たちは、今回の調査でヤングケアラーとされた人たちの４割強を占めるが、ケアの時間は多くはなくても、「ケアについて話せる人がいなくて孤独を感じる」「ストレスを感じている」（表の青のところ）が２桁のパーセントになっている。次に、１時間以上２時間未満の人たちは、この孤独とストレスに加えて、「自分の時間が取れない」「勉強の時間が充分に取れない」（表の紫のところ）ということが認識されるようになってくる。２時間以上４時間未満で新たに２桁になる項目は、「友人と遊ぶことができない」「睡眠不足」「体がだるい」という項目であり、４時間以上６時間未満になると、いろいろな項目でパーセンテージが上がる（表の赤のところ）。

1日あたりのケア時間と学校生活への影響（平日）

埼玉県の調査結果
23～24ページを基に
筆者が作成した表

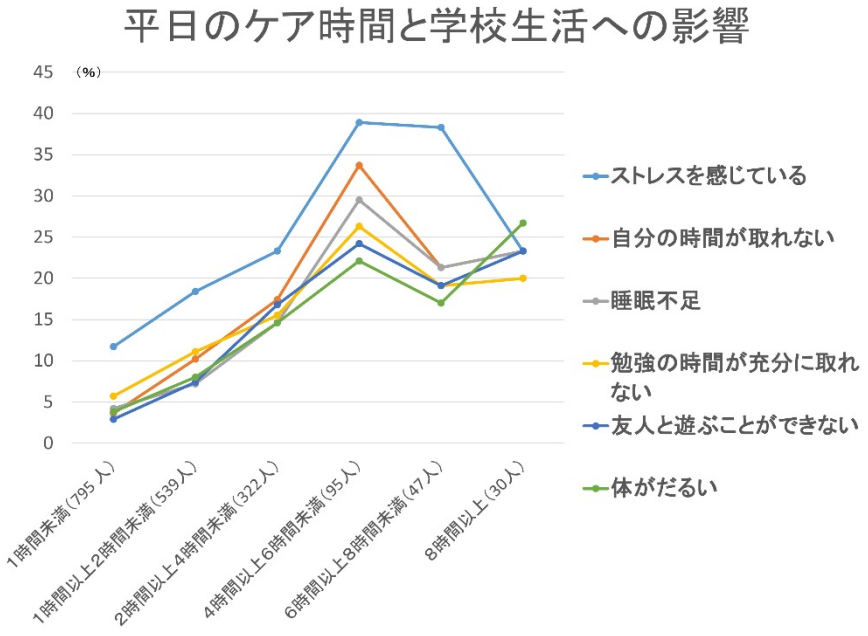
単位は%

	1時間未満（795 人）	1時間以上2時間未満（539人）	2時間以上4時間未満（322人）	4時間以上6時間未満（95人）	6時間以上8時間未満（47人）	8時間以上（30人）	無回答（141人）
学校を休みがちになっている	1.5	1.3	2.8	6.3	8.5	13.3	1.4
学校への遅刻が多い	1.8	3.3	6.5	12.6	4.3	10	2.1
部活ができない	1.5	3.5	7.1	13.7	6.4	13.3	0.7
勉強の時間が充分に取れない	5.7	11.1	15.5	26.3	19.1	20	3.5
授業に集中できない	2.6	3.7	8.4	11.6	8.5	13.3	3.5
成績が落ちた	0.9	3.5	4.7	18.9	8.5	6.7	1.4
友人と遊ぶことができない	2.9	7.4	16.8	24.2	19.1	23.3	1.4
周囲の人と会話や話題が合わない	1.1	3.3	7.8	6.3	10.6	20	0
ケアについて話せる人がいなくて孤独を感じる	22	19.1	17.7	12.6	25.5	20	7.8
ストレスを感じている	11.7	18.4	23.3	38.9	38.3	23.3	9.2
睡眠不足	4.2	7.2	14.6	29.5	21.3	23.3	5
しっかり食べていない	1.4	1.5	3.4	12.6	8.5	13.3	0.7
体がだるい	3.8	8	14.6	22.1	17	26.7	3.5
自分の時間が取れない	3.6	10.2	17.4	33.7	21.3	23.3	2.1
進路についてしっかり考える余裕がない	1.5	1.5	6.2	7.4	8.5	13.3	0.7
受験の準備ができていない	0.9	2	3.1	7.4	6.4	10	1.4
アルバイトができない	5.2	6.1	7.1	12.6	6.4	6.7	2.8
特に影響はない	49.9	41.6	37.9	32.6	40.4	40	14.2

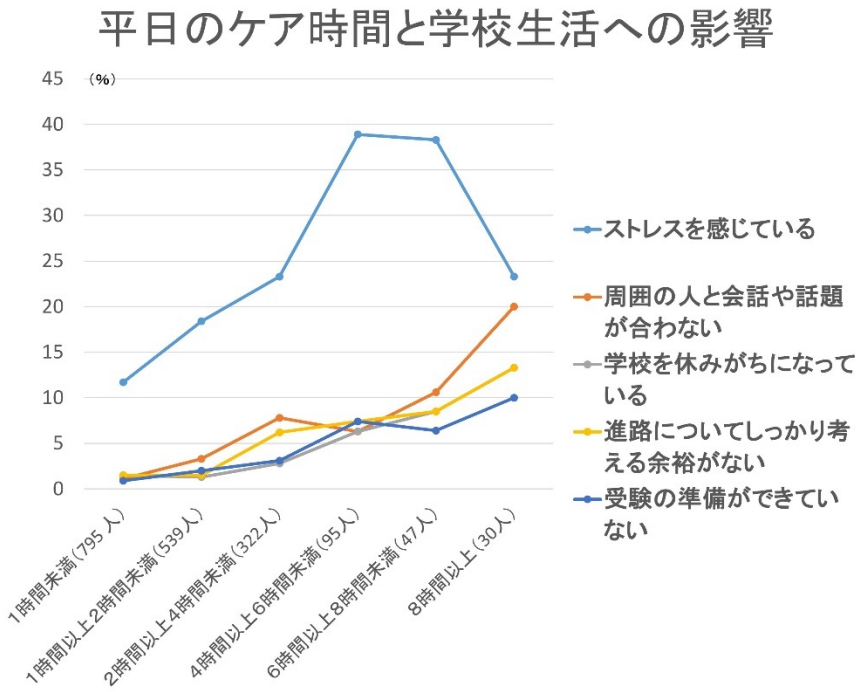
出典：埼玉県ケアラー支援に関する有識者会議　第１回資料

折れ線グラフでみると、「ストレスを感じている」「自分の時間が取れない」「睡眠不足」「勉強の時間が充分に取れない」「友人と遊ぶことができない」「体がだるい」の項目は、平日４時間以上６時間未満の層では 20%を超えている。

さらに１日のケア時間が８時間以上になると、ストレスは減るが、代わりに増えてくるのが、「周囲の人と会話や話題が合わない」「学校を休みがち」「進路についてしっかり考える余裕がない」「受験の準備ができていない」という項目である。体のだるさ、しっかり食べていない、授業に集中できないという答えも高くなっている。同世代と同じ生活をすることを諦めている人もいると考えられる。



17



18

出典：埼玉県ケアラー支援に関する有識者会議　第１回資料

このように見ていくと、どういう順序でケアの影響を受けていくのか、その傾向を見ることができる。まずは、自分の自由になる範囲での影響がある（①②）。それから、友人との関係や体調への影響がある（③）。さらに、学校生活の体面を保つことへの影響が出てくる（④⑤）。最終的に、将来への影響が出てくる（⑥）。

今、ヤングケアラーは、学校に行けているから大丈夫とみなされがちで、これは⑥になってからようやく支援につながれるかどうかという状況であるということになる。そこに至るまでに、ヤングケアラーたちが、ストレスや孤立感、大人に助けを求めてもしかたがないという感覚を持ってしまうのは、当前である。

高校生たちは、どういうところからケアの影響を受けていくのか

（ケア時間が増えていくと共に、10%以上になっていく項目）

ケアの影響増大により進行

① ケアについて話せる人がいなくて孤独を感じる、ストレスを感じる

↓

② 自分の時間が取れない、勉強の時間が充分に取れない

↓

③ 友人と遊ぶことができない、睡眠不足、体がだるい

↓

④ 成績が落ちた、部活ができない、学校への遅刻が多い、アルバイトができない、しっかり食べていない、授業に集中できない

↓

⑤ 周囲の人と会話や話題が合わない

↓

⑥ 学校を休みがちになっている、進路についてしっかり考える余裕がない、受験の準備ができていない

出典：埼玉県ケアラー支援に関する有識者会議　第１回資料（一部加筆）